

# 富山城跡試掘確認調査報告書

2009

富山市教育委員会

# 富山城跡試掘確認調査報告書

2009

富山市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、富山市が予定している富山城址公園整備計画に伴う富山城跡の第6次試掘確認調査報告書である。
- 2 調査は、富山市教育委員会が文化庁国庫補助金及び富山県費補助金の交付を受けて実施した。
- 3 試掘確認調査の概要は次のとおりである。

調査期間：平成20年8月1日～平成20年9月24日  
調査面積：46m<sup>2</sup>  
調査担当者：野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員）、  
小林高太・蓮沼優介・長谷部真吾・宮崎琢也（同嘱託）
- 4 本書には試掘確認調査のほか、石垣レーザー測量調査の成果を記載した。概要は次のとおりである。

測量期間：平成20年8月18日～平成20年8月20日  
測量図校正・データ作成期間：平成20年8月21日～平成20年12月26日  
測量面積：71m<sup>2</sup>  
監理・校正担当者：野垣好史
- 5 整理作業・報告書作成の概要は次のとおりである。

期間：平成20年9月25日～平成21年3月18日  
担当者：野垣好史  
整理作業・報告書作成にあたって、秋葉保香（富山市埋蔵文化財センター嘱託）・小林・蓮沼・長谷部・宮崎の協力を得た。
- 6 現地調査から報告書の作成にあたっては、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表したい（五十音順、敬称略）。

浦畑奈津子・坂森幹浩・宮田進一（富山県教育委員会生涯学習・文化財室）・富山市郷土博物館  
富山市公園緑地課
- 7 調査にかかるる原因・写真類および出土遺物は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。
- 8 本書の編集・執筆は、野垣好史が行った。

## 凡　　例

- 1 掲図の方位は座標北、水平基準は海拔高である。
- 2 公共座標は日本測地系を使用した。これは城址公園内に設置された石垣改修計画用基準点を継続して使用し、全体位置座標を構築しているためである。
- 3 トレンチ名の標記は、「20-1トレンチ」のように、調査年度—トレンチ番号とした。過去の調査トレンチも同様である。
- 4 遺構表記は、SD：溝、SK：土坑、SE：井戸、SP：ピットを用いた。

## 本文目次

第1章 経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 試掘確認調査の経過	2
第3節 石垣レーザー測量の経過	2
第4節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 試掘確認調査	
第1節 20-1トレンチ	5
第2節 20-2トレンチ	8
第3節 20-3トレンチ	11
第4節 20-4トレンチ	14
第5節 20-5トレンチ	14
第6節 出土遺物	15
第4章 石垣測量調査	
第1節 調査の経緯と目的	20
第2節 三次元レーザー測量の詳細	20
第3節 石垣区分	22
第4節 測量図に基づく調査項目	22
第5節 測量調査成果	27
第5章 総括	
第1節 20-3トレンチ検出の井戸SE1と富山城内の井戸について	31
第2節 本丸北部の旧地形について	34
第3節 P面石垣の測量調査の考察	35
引用・参考文献	37
図版	
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

- |                          |                                   |
|--------------------------|-----------------------------------|
| 第1図 試掘確認調査地点             | 第19図 P面石垣点群データ図                   |
| 第2図 富山城の位置と戦国後期における城館配置  | 第20図 安山岩石材分布図                     |
| 第3図 20-1 トレンチ平面図         | 第21図 砂岩石材分布図                      |
| 第4図 20-1 トレンチ断面図         | 第22図 その他石材分布図                     |
| 第5図 20-1 トレンチSKI平面図・断面図  | 第23図 玉石分布図                        |
| 第6図 20-2 トレンチ平面図         | 第24図 近代新補石分布図                     |
| 第7図 20-2 トレンチSKI平面図・断面図  | 第25図 刻印分布図                        |
| 第8図 20-2 トレンチ断面図         | 第26図 修理跡                          |
| 第9図 20-3 トレンチ平面図         | 第27図 富山城下町検出の井戸                   |
| 第10図 20-3 トレンチ断面図        | 第28図 前田利同城囲の図（部分）（上）と越中富山御城御絵図（下） |
| 第11図 20-4 トレンチ平面図        | 第29図 前田利同城囲の図と越中富山御城御絵図の重ね合わせ図    |
| 第12図 20-5 トレンチ平面図・断面図    | 第30図 本丸北部周辺の旧地形の推定                |
| 第13図 20-1・2 トレンチ出土遺物実測図  | 第31図 明治26年富山市街実測図（部分）             |
| 第14図 20-3 トレンチ出土遺物実測図（1） | 第32図 明治40年頃の北東部内堀                 |
| 第15図 20-3 トレンチ出土遺物実測図（2） | 第33図 昭和29年の石垣写真（部分）               |
| 第16図 本丸石垣位置図             |                                   |
| 第17図 石垣測量区分図             |                                   |
| 第18図 P面石垣測量図             |                                   |

## 挿 表 目 次

第1表 石垣年度別計測一覧

第2表 計測各石垣面の位置・面積

## 図 版 目 次

- |                  |                     |
|------------------|---------------------|
| 図版 1 空中写真        | 図版 6 20-5 トレンチ・石垣刻印 |
| 図版 2 20-1 トレンチ   | 図版 7 出土遺物（1）        |
| 図版 3 20-2 トレンチ   | 図版 8 出土遺物（2）        |
| 図版 4 20-3 トレンチ   | 図版 9 P面石垣           |
| 図版 5 20-3・4 トレンチ |                     |

# 第1章 経 過

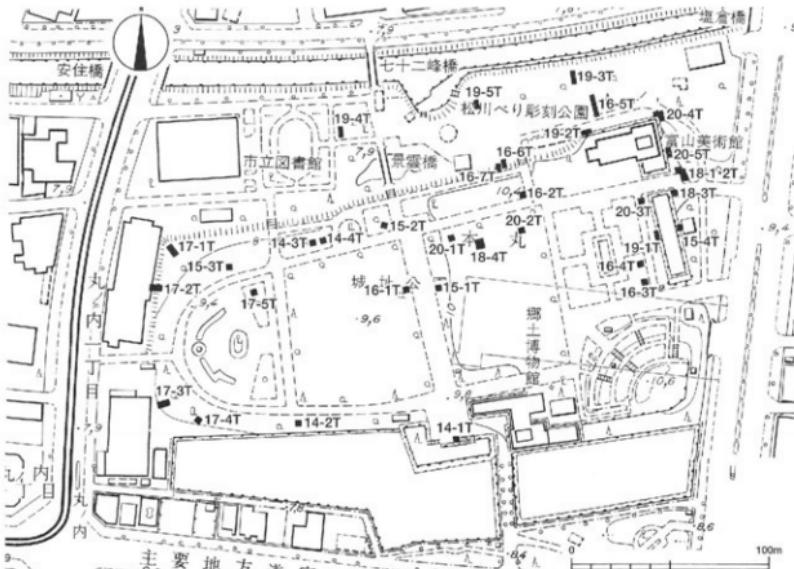
## 第1節 調査に至る経緯

富山城跡は、平成5年3月発行の『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、埋蔵文化財包蔵地として知られるところとなった。このときの範囲は、現在の富山城址公園を中心とした、旧本丸・西の丸・二の丸を含む90,000m<sup>2</sup>であったが、平成10年の文化庁通知を受け、平成12年4月に改訂した『富山市遺跡地図』において城下町主要部を含めた316,000m<sup>2</sup>に範囲を拡張した。

富山城址公園は、昭和30年代に整備がほぼ完成したが、その後、施設の多くが経年変化により老朽化し、樹木の生長等により大木が密植状態となるなど公園機能の低下が目立ちはじめた。富山市では平成10年度に「城址公園整備基本計画」を策定し、これに基づいて平成13年度に基本設計の策定がなされたが、中心市街地活性化の観点から観光拠点としての活用を図る気運が高まってきたことを踏まえ、平成16年度に基本計画の見直し・基本設計が行われた。これに基づいて平成17年度から堀や駐車場、石垣の整備などが実施され、現在も整備が進められている。

こうした整備との調整を図るために、城址公園内の埋蔵文化財の所在状況を確認する目的で平成14年度から継続して試掘確認調査を実施している。試掘確認調査は、城址公園の全域を対象に平成19年度まで計29地点行った。その成果は、これまで『富山城跡試掘確認調査報告書』2004・同2006・同2007・同2008として刊行した。試掘確認調査とともに石垣レーザー測量調査もを行い、2007・2008年の報告書に成果を収録している。石垣レーザー測量の調査経緯の詳細は第4章第1節に記す。

なお、これらの調査はいずれも富山市教育委員会埋蔵文化財センターが国庫補助事業として行った。



第1図 試掘確認調査地点

## 第2節 試掘確認調査の経過

今年度の試掘確認調査は平成20年8月1日に着手し、9月24日に完了した。

調査は、当初4本の試掘トレンチを掘削する予定であったが、20-4トレンチの表土直下に全面にコンクリートがあり掘削できない状態だったため、隣接地に新たに20-5トレンチを設定して調査を行った。各トレントにおける作業は、いずれも調査員立会のもと最初にバックホウによる掘削を行い、その後、作業員による人力掘削作業を行った。作業は5本のトレントの調査を併行して実施した。人力掘削作業と併行して、隨時図面作成・写真撮影を行い、調査記録を作成した。

調査記録の作成完了後、9月24日に埋戻しを行って、現地における調査を完了した。

## 第3節 石垣レーザー測量の経過

試掘確認調査と併行として石垣レーザー測量を行った。計測箇所は搦手北石垣の東面全体と北面の一部で、現在佐藤記念美術館が建つ場所の東面石垣である。

作業は、最初に機器を用いた計測を行った。使用機械・計測方法等は第4章第2節に記した。計測した石垣の点群データおよびオルソ画像をもとに、市埋蔵文化財センターの監理担当者が、現地の石垣を観察しながら輪郭や割面・刻印等を書き入れる作業を行った。こうしてできた図面をもとにデジタルトレースを行い、1/100測量図を作成した。

測量の経過は次のとおりである。

平成20年8月18日に周辺の基準点から計測対象地の近くに座標を取得した。座標は日本測地系による。同日に計測対象地の石垣に生えた草等の除去を行った。20日に機器を用いた計測を行った。

平成20年8月21日から点群画像とオルソ画像の作成を行い、9月1日からは出力したオルソ図面に市埋蔵文化財センターの監理担当者が輪郭・割面・刻印等を書き入れ原図を作成していった。測量対象地の南部は樹木によって正面からの写真撮影ができなかったため、オルソ画像でなく、点群画像を用いて原図を作成した。その後、原図をもとにデジタルトレースを行い、12月26日に業務を完了した。

## 第4節 整理作業の経過

整理作業は、試掘確認調査終了後から平成21年3月18日まで行った。遺物整理作業は、注記・接合の確認を行った後、実測作業を行った。実測は、近世以前の遺物を対象に選定し、土器は細片が多くたため口縁部が残るものを中心にできるだけ図化するよう努めた。遺物写真撮影は図化遺物について行った。遺物整理作業・遺構図面整理作業・写真撮影と併行して報告書の原稿作成を行い、平成21年3月19日に本書を刊行した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

富山城跡は富山市本丸地内に位置し、市街地の中心部にある。富山城址公園は、児童公園や芝生広場のほか博物館・美術館が置かれ、観光地となっている。

富山県の中央に位置する富山平野は、主に神通川と常願寺川の扇状地からなる。後述するように富山城は神通川とのかかわりが特に深い。神通川を挟んで約5km西方には呉羽山丘陵が北東—南西方向に延び、県城を東西に二分する。呉羽山丘陵周辺は、旧石器時代以来の遺跡の密集地である。

神通川は、現在富山平野を南北に真っ直ぐ流れているが、江戸時代以前は富山城の西側で大きく曲がり、富山城のすぐ北を大きく蛇行して東流していた。富山城の東は神通川の支流、鶴川が流れ、富山城は三方を川で囲まれる要害の地にあったことがわかる。

富山城は、旧神通川と鶴川の合流点の西にあり、神通川右岸の標高約10mの自然堤防上に立地する。江戸期の神通川の幅は約190mと推定されている。神通川は明治に至るまで蛇行した流路をとっていたが、洪水の被害が度々生じたため、明治から昭和初期にかけて流れを直線的に変える馳越工事が行われた。工事により、富山城の北を流れている神通川河道は廃川地となって埋め立てられ、県庁や市役所が建つ県の中心地となった。旧河道は規模を縮小して、現在松川としてその名残をとどめている。

### 第2節 歴史的環境

**中世の富山城** 最初に城を構えたのは、放生津を本拠地とした越中守護代神保長職（『越登賀三州志』では水越勝重）と伝えられる。長職は富山以西をおさえる40余りの城邑群の頂点として富山城を位置づけた（高岡1981、佐伯1992）。その後、上杉謙信の攻略（永禄3年）、一向一揆の占拠（元亀3年）と上杉の攻略（天正元年）、神保長住の進出（天正6年）、長住の幽閉（天正10年）、佐々成政の入城（天正11年）があり、天正13（1585）年に成政を降ろした豊臣秀吉により富山城は破却される。

神保長職による中世富山城の築城年代については諸説あるが、現在のところ久保尚文氏による天文12（1543）年説（久保1983）が有力とみられる。中世富山城の位置については、城とその城下について描いた往來物『富山之記』（山田孝雄本）の内容から、これまで富山城址公園の南の星井町以西にあったとする説と、現在の城址公園の位置にあったとする二説があった。平成14年度に行った試掘調査の結果、戦国時代後期の堀跡（業研堀）・鍛冶工房跡・陶磁器類・茶臼などが確認され、中世富山城が現城址公園に存在していた可能性が高くなった（富山市教委2004、加藤・古川2004ほか）。

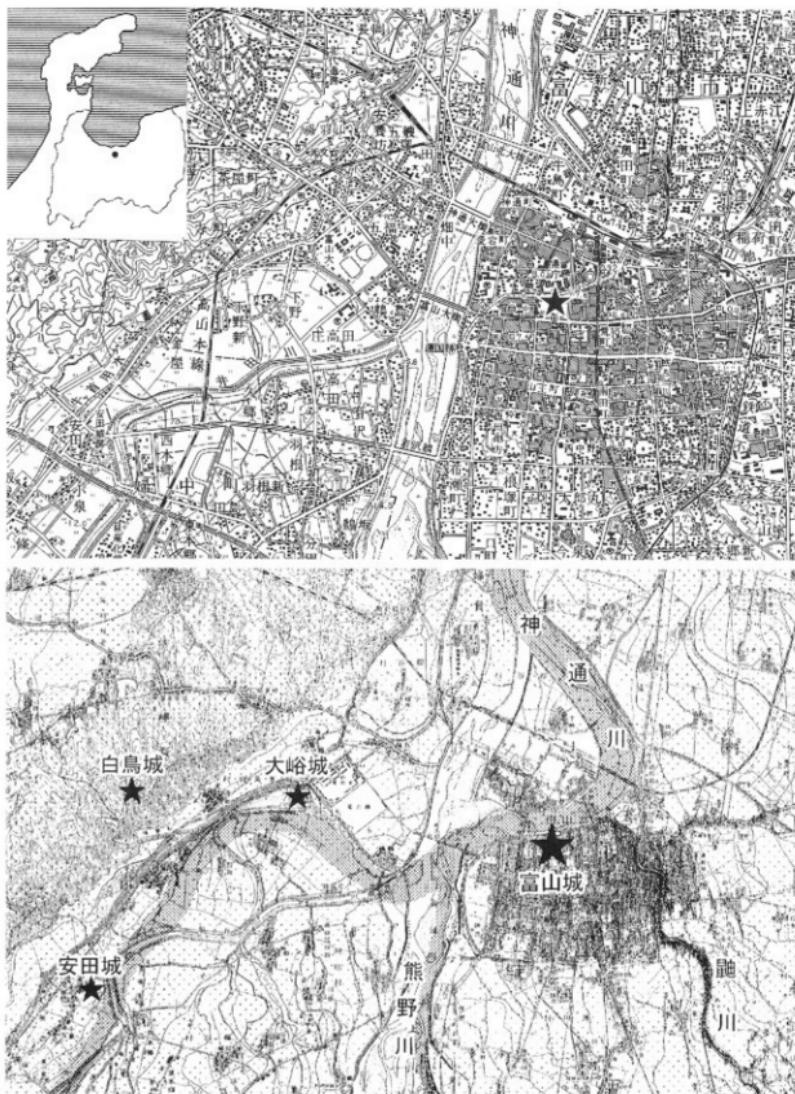
第2図下段は戦国後期における神通川及び支流を推定したものである。この時期、神通川の本流は、現在は支流の井田川であったと推定され、白鳥城や大船城・安田城はこの流路の左岸に位置している。

**近世の富山城** 慶長2（1597）年に富山城に入った加賀第二代藩主前田利長は、翌年家督相続のため金沢に移ったが、慶長10（1605）年、隠居により再び富山城に入ることになった。このときに大規模な改修が行われ、富山城は近世城郭として整備された。ところが、慶長14（1609）年、大火によって富山城は焼失し、その後は再建されず、元和元（1615）年、一国一城令により廃城となった。

寛永16（1639）年、富山藩10万石が成立する。初代藩主となった前田利次は、廃城となっていた富山城を居城とし、幕府の許可を得て本格的な整備を行った。幕府からは新たな天守のほか、櫓3ヶ所、櫓門3ヶ所などの新築が許可されたが、天守や櫓は建てられず、櫓門も1ヶ所にとどまった。

**近代以降の富山城** 明治6（1873）年に明治政府から廃城令が出され富山城は廃城となる。その後、御殿などの建物解体や塹の埋め立てが進み、本丸跡には県庁が置かれた。旧城下町も市街地化が進み、

近代富山の新たな中心地となった。昭和29（1954）年の富山産業博覧会の際、犬山城や彦根城を参考に天守閣が建設され、現在は富山市郷土博物館として利用されている。



第2図 富山城の位置と戦国後期における城館配置（1:50,000）

（上段:平成7年国土地理院地図 下段:明治44年陸地測量部測図をもとに古川知明氏作成）

## 第3章 試掘確認調査

### 第1節 20—1トレンチ（第3～5図、図版2）

本丸北西部に設定したトレンチである。旧芝生公園の北西部にあたり、すぐ北に前田正甫公の銅像が建っている。現地表面の標高は約10.2mである。地下の遺構所在状況を確認するため設定した。

地表から約1mまで重機による掘削を行い、それより下層を人力で掘削した。遺構の所在や造成面が確認されたことで江戸時代以前に4面の遺構面があることが推測された。上層から第1面、第2面…と呼称する。以降のトレンチも同様である。

**地表～第1面まで** 地表下約0.3～0.4mに炭化物を多く含む3層があり、戦災に由来すると考えられる。3層直下に10～20cm大の円礫を多く含む掘り込み（4層）がある。近代建物の基礎と考えられる。これより以下、第1面までは水平堆積をなしている。盛土造成されたものであろう。

**第1面** 地表下1.2m（標高約9.0m）で土坑が2基確認された。実際の調査では、第2面のレベル（標高約8.9m）まで掘り下げてから土坑の掘削を行った。SK1は、不整楕円形を呈すと推定され、東西約1.2m、南北0.8m以上、深さ0.55mである。かわらけが出土した。SK2は円形で、直径0.5m以上、深さ0.25m以上である。かわらけ、越中瀬戸、鉄製品が出土した。

なお、SK1の南壁断面に約30cmの大型礫がみえたため、壁面を横穴状に掘削し同様の礫が認められないか確認を行った。その結果、割石が3石、半円状に配置されているのが認められた（第5図）。これが人為的に配置されたものか何らかの施設であるか等については判断できなかった。

**第2面** 第1面から約0.1m下がった地点（標高約8.9m）で確認した。南東部の床面を中心に灰白色粘土ブロックが多量に混じる上層（13・14層）があり、これがある時期の造成面を示すと判断した。この粘質土層の一部は鉄分により赤化している。また、東壁の13層直上で黄褐色粗砂層（12層）が認められた。鉄分と粗砂層は、洪水による被水があったことによるものと考える。

**第3面** 本面は当初は遺構面と認識せず、第4面まで一気に掘り下げていたが、標高8.7mの北西隅で炭化物状の黒色土が一部確認された。この広がりを面的に把握するためトレンチを西側に約0.6m拡張したところ、黒色土は北西部を中心に厚さ約5cm堆積し、上面に浅い凹凸が認められた（第3図下）。また、黒色土層直下の17・18層は水平面を形成している。黒色土層が火災等による炭化物に由来すると解釈し、17・18層が水平面を形成していることを評価すれば、17・18層上面に生活面があった可能性がある。南西部の黒色土層がない範囲は、第1面のSK1によって切られたのかもしれない。

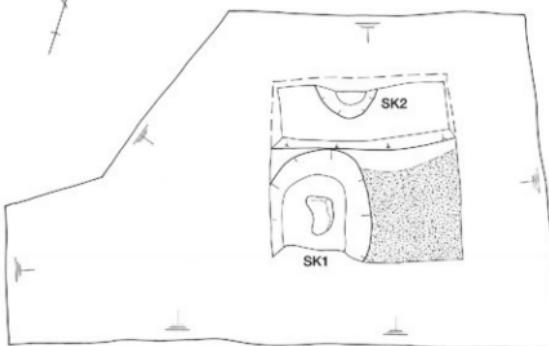
**第4面** 地表から約1.8m下（標高約8.4m）で、黄褐色砂の地山面（20層）を確認した。地山面に断面割りを入れたが、80cm下までは同様の砂層が続くことを確認している。

本面では、溝1条（SD1）とピット3基（SP1～3）を検出した。SD1は、南北に延び、検出長1.08m、幅0.45m、深さ0.08mである。ピットはいずれも円形で、SP1は径0.2m、深さ0.06m、SP2は径0.2m、深さ0.05m、SP3は径0.25m、深さ0.1mである。SP2からかわらけ（第13図5）が出土した。なお、南東隅の地山直上で完形のかわらけ1点（第13図2）が出土した。

#### 各遺構面の時期 限られた出土遺物からではあるが、各遺構面の時期について検討したい。

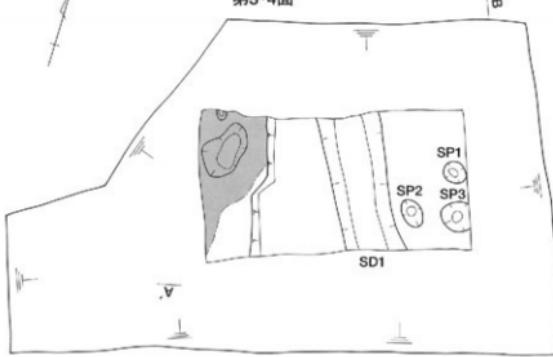
第1面は、SK2から越中瀬戸（第13図10）の出土があった。細片だが、宮田編年（宮田2007）のII期（17世紀初めから前半）と思われる。第2面より下層は近世遺物の出土が多く中世期と捉えられる。第2・3面付近は出土遺物が少ないが、第4面の溝、ピット内およびその直上付近から出土したかわらけは、近くの15-1トレンチの堀跡から出土したもの（富山市教委2004）と似る。したがって第4面は16世紀第二四半期～後半頃と考えられる。

第1・2面



■ 第2面の粘土ブロック混土層の分布範囲

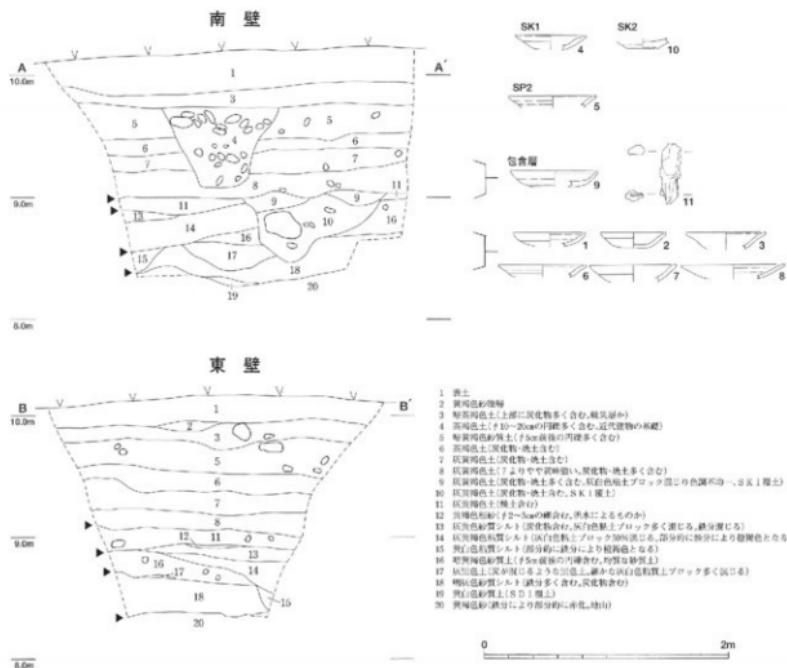
第3・4面



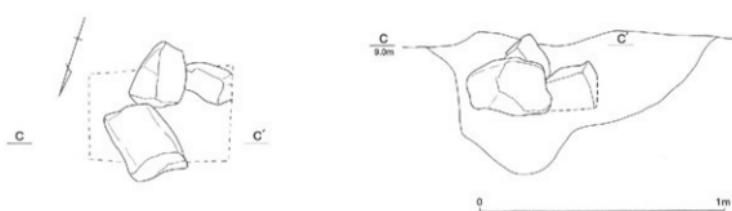
■ 第3面の黒色土分布範囲

0 2m

第3図 20-1トレーニング平面図



第4図 20-1トレング断面図



第5図 20-1トレングSK1平面図・断面図

## 第2節 20—2トレーニング (第6~8図、図版3)

本丸北中部に設定したトレーニングである。旧芝生公園の北東部にある。現地表面の標高は、約10.55mである。地下の遺構所在状況を確認するため設定した。

地表から約1.3mまで重機による掘削を行い、それより下層を人力で掘削した。遺構の所在や造成面の確認により江戸時代以前に少なくとも3面の遺構面があることを確認した。

**地表～第1面まで** 1層は平成19年度の地下駐車場改修工事に伴って発生した盛土であり、その下の2層が元々公園に植わっていた芝生面である。5・6・7層は堅くしまり、造成盛土であることがうかがえる。近代以降の造成である。9層は、径10cm前後の円礫が多く確認できた。明治時代に県庁が建っていた頃の路面ないしは生活面であろうか。ここから陶管で覆われた2本の電気配管の掘り込み(8層)がある。出土遺物からみても9層より上層は近代以降であることが確定である。これより下層を江戸時代以前の可能性がある層として扱う。

**第1面** レンチ南西部、地表下約1.55m (標高約9.0m) で土坑1基が確認された (SK1)。上層断面に観察によれば16層から掘り込まれるが、同層付近では平面的なプランを確認できず、27層付近 (標高約8.3~8.4m) においてはじめて確認した。平面形は整った方形を呈し、掘り込み面からの深さは0.86mである。底面近くから鉄板を約20cm角の方形に組んだ遺物 (第13図21) が出土した。鉄板の内部に木質が残り、柱材の端部に巻付けていたものと考えられる。これが柱材に伴うものならば、SK1は柱穴となる可能性が高いが、礎石や根固め石は伴わない。

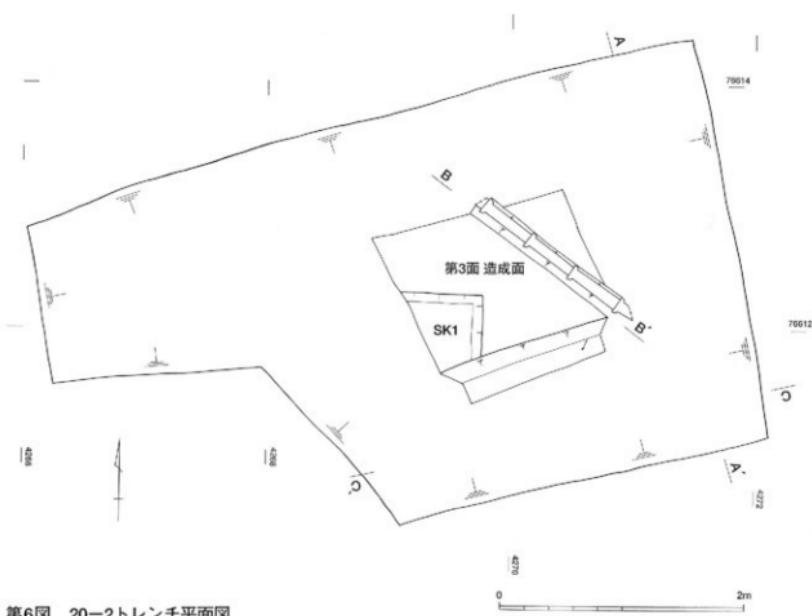
**第2面** 地表下約1.65m (標高8.9m) で、土坑状の掘り込みが認められた。レンチ北東部の近代配管と壁面の間の狭い区画に位置するため平面的には確認できず、東壁断面の精査により確認した。平面形は不明だが、土坑SK2としておく。深さ0.65mである。21層から掘り込まれているが、16層からの掘り込みの可能性もある。16層からの掘り込みならば第1面と同じ遺構面となる。

**第3面** 地表下約2.3m (標高8.25m) で検出した。遺構は伴わないが、31層が平坦に堅く整地されており、造成面と理解できる。直上には洪水によるとみられる粗砂 (30層) の堆積がある。また、B-B' 断面でわかるように、その上は北西から南東に向かって流れ込むように堆積している。こうしたことから、第3面は洪水等の自然的な要因によって埋没したと考えられる。

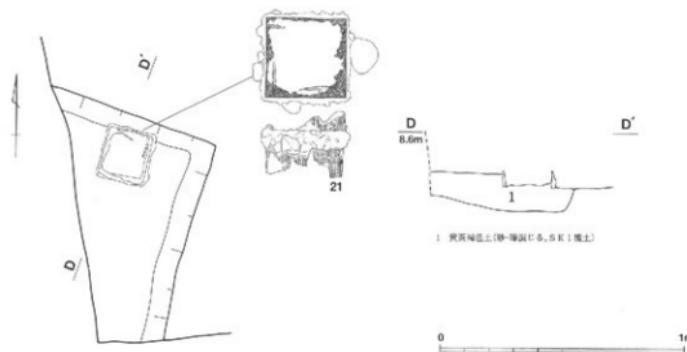
**第3面より下層** 第3面より下層は、レンチ南部に断割りを入れて下層の状況を確認した。地表下3.7m (標高6.85m) まで掘削したが、地山は未検出である。南壁の土層はいずれもほぼ水平堆積をなしている。掘削範囲が狭小なこともあります、遺構面は確認できなかった。37層より下はシルト質となり、38層より下層では滲み出るような湧水があった。また、同じ38層から古代の土器・須恵器が出土しており、中世富山城成立前の堆積土と考えられる。

東西に位置する20-3トレーニング、20-1トレーニングではそれぞれ標高約7.7m、8.4mで地山を検出したが、本トレーニングでは標高6.85mでも地山は未検出であった。第5章第2節で検討するように、本トレーニング付近は大きく谷状に落ち込む旧地形があつたと推測する。

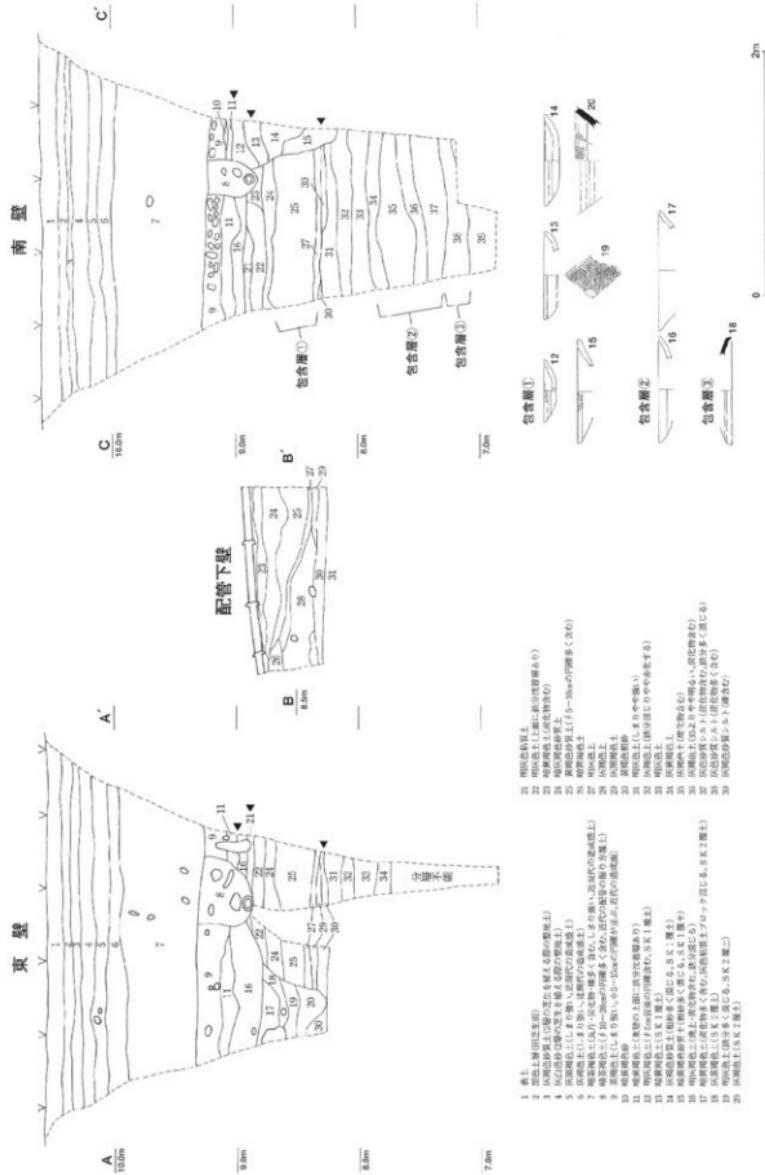
**各遺構面の時期** 第1面は時期を特定できる遺物がないが、近代層の直下であることから幕末期前後ではないか。SK1出土の方形鉄板は、本丸御殿の柱材に伴う可能性もある。第2面付近も出土遺物が少ないので詳細は不詳である。第3面直上出土のかわらけは端部を上につまみ上げるタイプで、16世紀第二～第三四半期 (富山市教委2006) と思われる。第3面より下層ではこうしたタイプがないのでやや古くなると考える。したがって、第3面は中世富山城成立期頃の造成面ではないか。かわらけは37層まで出土しており、37層より上層はこのときの造成に伴う埋土と考えられる。38層からは古代の須恵器の出土があるため、同層以下は古代以前かもしれない。



第6図 20-2トレンチ平面図



第7図 20-2トレンチSK1平面図・断面図



第8図 20-2トレンチ断面図

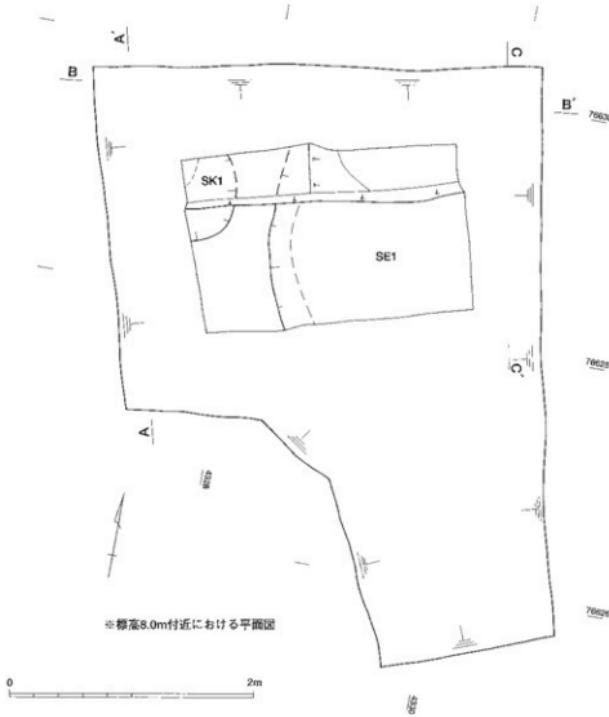
### 第3節 20-3トレンチ (第9・10図、図版4・5)

本丸北東部に設定したトレンチである。すぐ東側は擧手石垣が築かれている。北側は現在、佐藤記念美術館が建つ。現地表面の標高は、約10.0mである。地下の遺構所在状況を確認するため設定した。

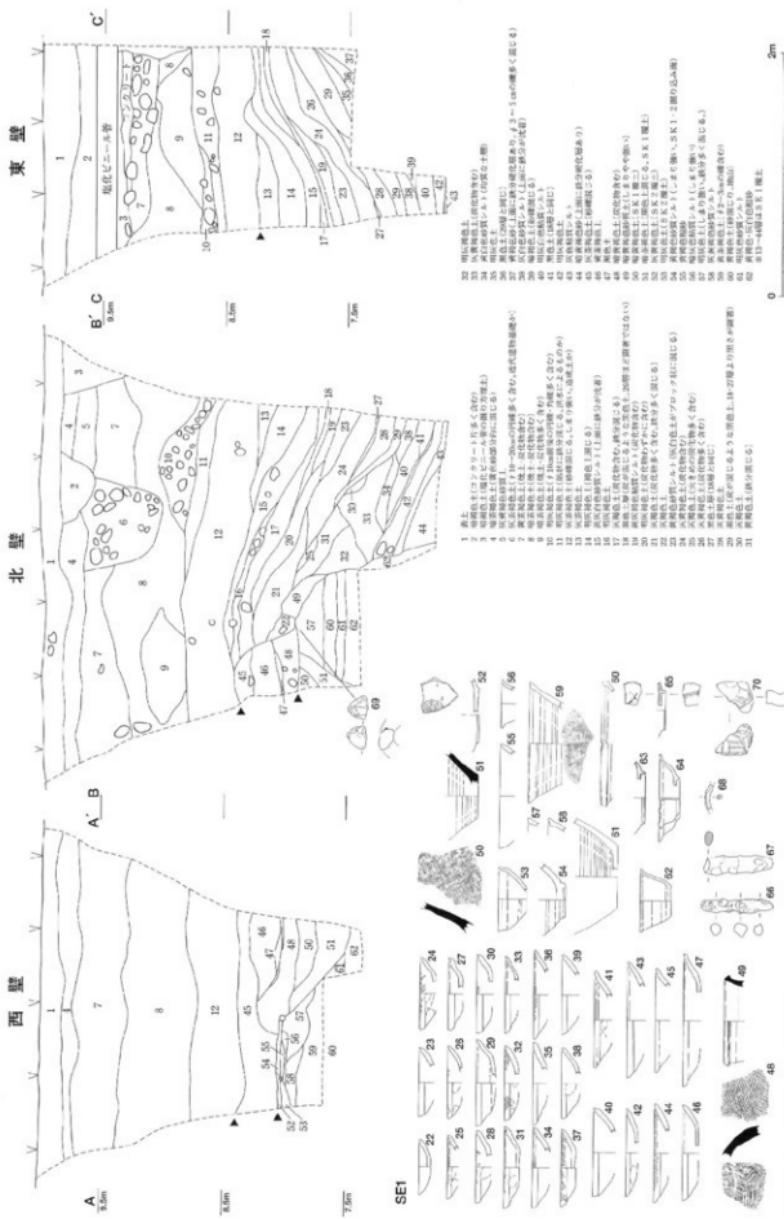
地表から約1.3mまで重機による掘削を行い、それより下層を人力で掘削した。遺構の所在状況により江戸時代以前に少なくとも2面の遺構面があると判断した。

**地表～第1面まで** 地表下約0.4m（標高約9.6m）に円窓を多く含む掘り込みがある。20-1トレンチに同様の掘り込みがあり、近代建物の基礎と考えられる。12層までの詳細な年代は不明だが、他のトレンチでは近代以降は上層の単位が大きくなる傾向があることから、本トレンチも12層以上は近代以降と考える。

**第1面** 地表から約1.6m下（標高8.4m付近）の地点にある。ここから大規模な掘り込みが認められる。当初は北東に向かってなだらかに落ち込む土層と認識し、掘り進めていたが、標高8.0～8.2m付近で弧状の平面プランを確認した。その後、北壁断面を精査したところ、標高8.4mから掘り込みがあることが確認できた。トレンチ北部に断割りを入れて下層の状況についても確認したところ、垂直に近い角度で落ち込んでいた。当初は規模から判断して堀状の遺構の可能性を考えたが、堀と



第9図 20-3トレンチ平面図



第10図 20-3トレンチ断面図

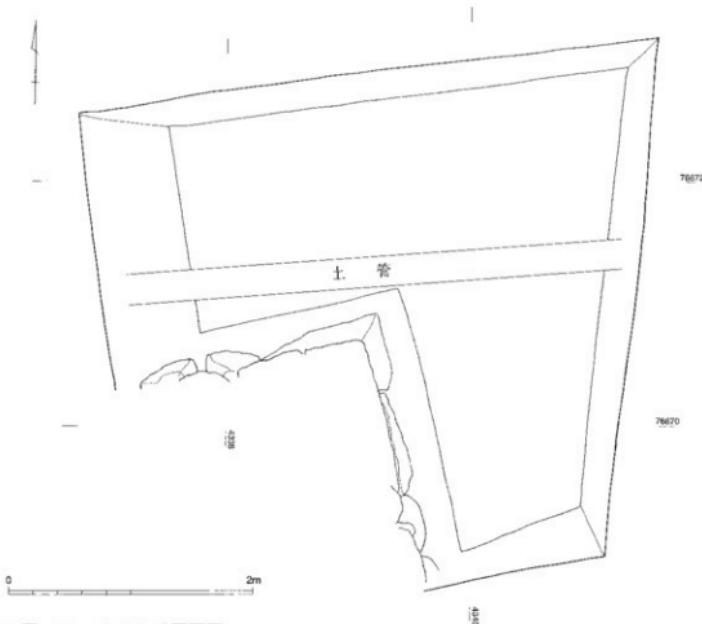
してはかなり急激な角度で落ち込むことから、本遺構は井戸の可能性が高いと判断した（SE1）。

掘り込み面である標高8.4m付近におけるSE1の規模は、推定径約5.4mである。ここから急傾斜で落ち込んだ後、途中でやや傾斜が緩くなり、標高8.0m付近で再び垂直に近い角度で落ち込む。標高8.0m付近における規模は推定径約3.6mとなる。第9図に示したSE1平面図はこのレベルのものである。なお、傾斜が緩くなる箇所では、断面にピット状の浅い掘り込みが認められた（22層）。SE1は覆土が灰色系、基盤となる土層は黄色系を呈し、断面でみると違いが明瞭である。覆土は薄い土層が北東に向かい下がって堆積する。覆土のうち18・27・29・41層は、炭化物を含むないしは腐植土層のような黒色土が特徴である。特に29層は厚く、黒さの度合いが顕著である。掘り込み面から約1.6m（標高約6.8m）の深さまで断割りを入れて掘削したが、底面は検出できていない。石組や木組は確認しておらず、より下層にこうした井戸側が存在することも考えられる。今回掘削したのは井戸上層の掘り方部分と考えられる。

出土遺物は多い。須恵器、かわらけ、株洲、瀬戸美濃、越中瀬戸、青磁、白磁、青花、鉄製品、銅製品等がある。

**第2面** 地表下約2.0m（標高約8.0m）で、遺構2基を確認した（SK1・2）。SK1はトレンチ北西部で一部のみ検出した。深さは0.58mである。SK2は、断割り部分にあったため平面的な確認はできなかったが、西壁断面に浅い掘り込みを認めた（52・53層）。深さは0.12mである。

本遺構面の基盤土となる54～59層は、単位の細かい土層が堆積し、しまりが強い。盛土により造



成されたことが考えられる。基盤土からは韁の羽口（第15図69）が出土した。

**第2面より下層** 地表下2.3m（標高7.7m）で検出した60層が黄褐色土の地山面となる。この地山面で遺構は確認していないが、本トレンチの南約20mに設定した19-1トレンチでピット1基を検出している（富山市教委2008）。19-1トレンチにおける黄褐色土の地山検出レベルは標高約7.3mで、本トレンチより約0.4m低い。地山が南に向かって下がることが想定される。

60層より下層は、北壁際と西壁際に断割りを入れて下層を確認した。60層の直下に明灰色砂質シルト（61層）が厚さ約0.1mあり、その下は黄褐色・灰白色粗砂（62層）が続く。

**各遺構面の時期** 第1面のSE1覆土から出土した遺物の時期は、概ね16世紀後半～17世紀初め頃と考えられる。したがって、SE1は16世紀中頃の中世富山城成立期に掘削・使用された遺構である可能性が高い。第2面以下は時期を推測できる出土遺物がないため不明である。

#### 第4節 20-4トレンチ（第11図、図版5）

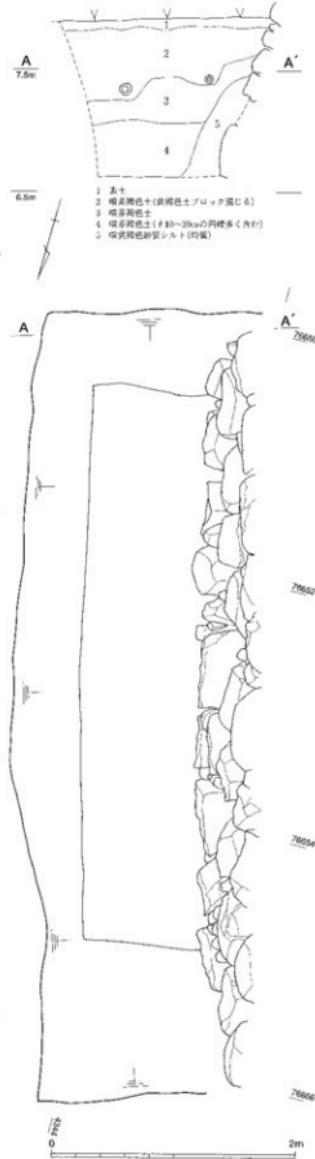
本丸搦手北石垣の北東隅角部に設定したトレンチである。現地表面の標高は約7.65mである。この場所はもともと堀がめぐっていたが、戦後埋立てられた。

地表下の石垣の状況を確認する目的で掘削を開始したが、地表下約0.5mで全面にコンクリートが打たれ、それより下部は掘削できなかった。コンクリートは近代以降に隅角部の石垣の崩落を防ぐため施されたものであろう。

出土遺物はいずれも近現代の陶磁器・瓦である。

#### 第5節 20-5トレンチ（第12図、図版6）

本丸搦手北石垣の東面際に設定したトレンチである。現地表面の標高は約7.85mである。上述の通り20-4トレンチで深くまで掘削できなかったため、隣接地に本トレンチを設定した。20-4トレンチ同様、もともと堀がめぐっていた場所だが、戦後埋立てられた。地表下の石垣の状況を確認する目的で調査を行った。



第12図 20-5トレンチ平面図・断面図

地表下約1.3mまで掘削を行った。近現代のゴミや陶磁器等が多量に混入していたが、5層はそうしたもの不含む均質な砂質シルトである。他所から持て來た搬入土が堀の埋め立てに用いられたのであろうか。トレンチ内の石垣は布積状となっている。詳細は第4章、第5章第3節で述べる。

出土遺物はいずれも近現代の陶磁器・瓦である。

#### 第6節 出土遺物（第13～15図、図版7・8）

**20-1トレンチ**（第13図1～11） 1～8はかわらけである。1は口縁部が緩く内湾して立ち上がり端部は丸い。2は完形である。底部は丸底風である。内面は口縁部を横撫した後、見込みを一方向に撫である。端部は上方へ小さく摘み上げる。3・4は口縁部が外反し、端部はごくわずかに丸く摘み上げる。5は口縁部が外反し、端部はごくわずかに丸く摘み上げる。外面は撫でによって段ができる。6は3・5と口縁部の形態は似るが、端部の摘み出しがみられない。7も6と同様だが、器壁が厚い。8は口縁部が緩やかに外反しながら立ち上がる。器壁が薄い。

9は越中瀬戸の素焼皿である。回転糸切りによりロクロから切り離し後、回転ヘラ削りを行っている。10は越中瀬戸の丸皿である。削り出し高台である。内底面に釉止めの段がある。

11は刀子の可能性を考えられるが詳細は不明である。先端部を除き全体が厚く錫で覆われている。

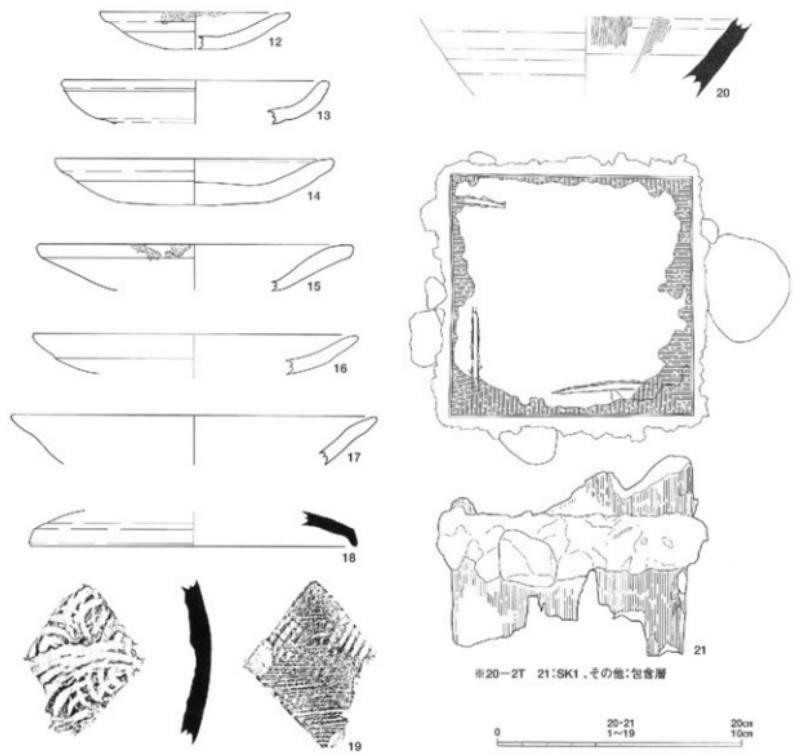
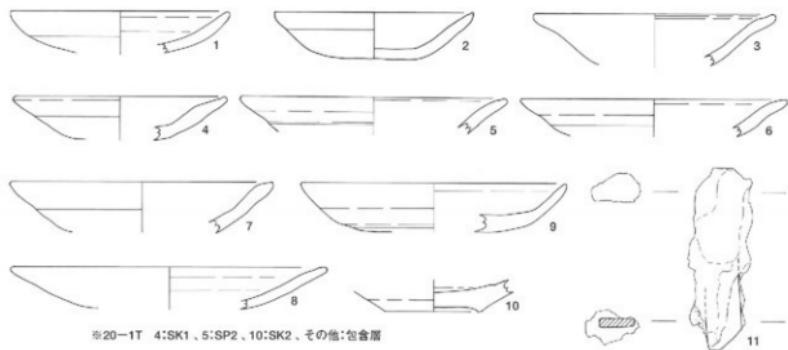
**20-2トレンチ**（第13図12～21） 12～17はかわらけである。12は口縁部が外反し、端部はごくわずかに摘み上げる。内外面とも油煙が付着する。13は口縁端部外面を強く撫である。14は口縁部が緩やかに外反し、端部を摘み上げる。器壁が厚い。15は緩やかに外反し、端部外面を撫でて面を取る。内面は明瞭な撫で痕がみえる。外面に油煙が付着する。16は口縁部が強く撫でられ段ができる。17は口縁部が緩やかに外反する。

18は須恵器の壺蓋である。口縁端部を折り曲げ垂下させる。19は須恵器の壺である。外面はカキ目後叩き目文、内面は同心円当て具痕が残る。20は珠洲の擂鉢である。・単位幅3.3cm17条の鉢目が施される。

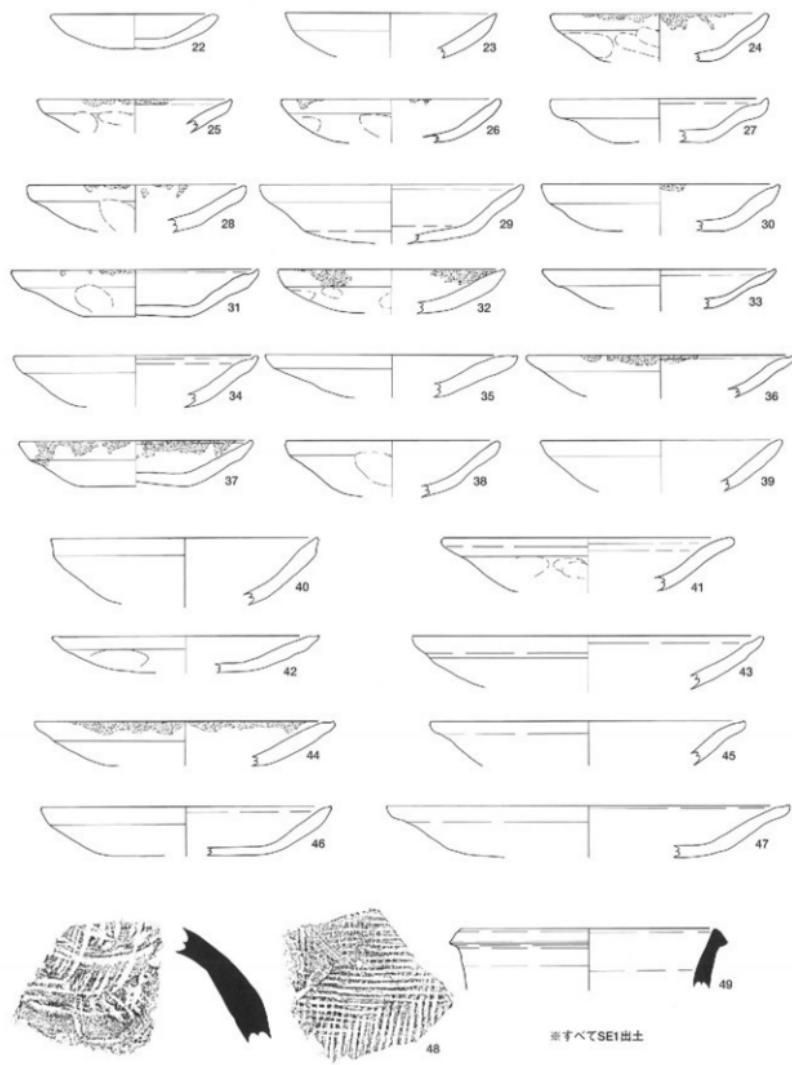
21は柱材に巻付けた鉄板と推定される。・辺19.4～20.0cmである。木質部が一部残る。外側面に幅約5cmの帯状に付着し、が硬化した箇所がみられるため、鉄板はおおよそこの範囲に巻かれていたと考えられる。硬化部分には円礫も付着する。内部には釘がみえ、鉄板の外側から釘を打ち柱材に固定した可能性が高い。ただし、鉄板より下部にも釘を打った箇所があることから釘の用途はそれ以外にもあったのかもしれない。釘は現在は3本が残る。これ以外に少なくともあと2本存在していたが、取り上げの際に脱落した。

**20-3トレンチ**（第14・15図） 22～47はかわらけである。かわらけは口縁部が外反し、端部を小さく摘み上げるタイプが多い。細片が多いため口径は正確ではないが、概ね8～9cm前後、10cm前後、12cm前後のものに分かれる。14cmを超える大型品もある。赤色酸化粒を含む個体が多い。

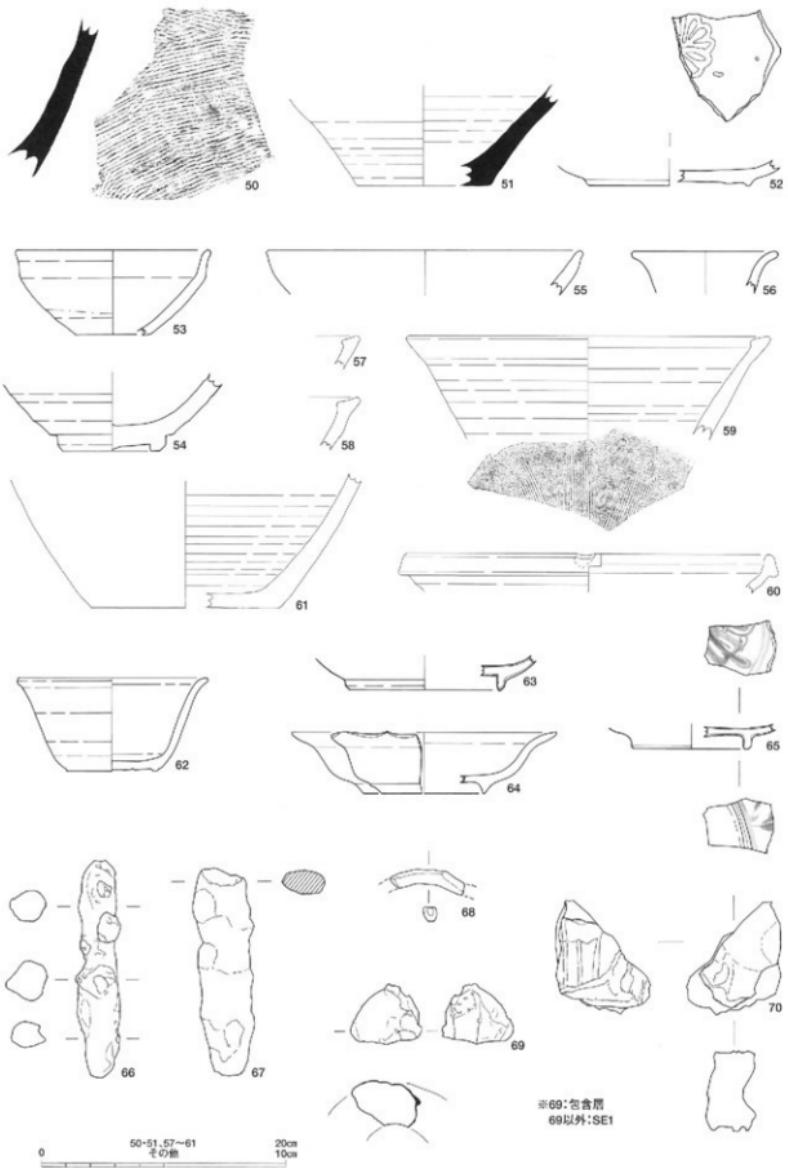
22は口縁部が内湾し、端部は丸い。底部は丸底風である。全体的に磨滅している。23は口縁部が内湾し、端部は尖る。24・25は口縁部が外反し、端部はごくわずかに摘み上げる。内外面に油煙が付着する。26は口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸い。指頭圧痕が残る。油煙が付着する。27は口縁部が大きく外湾し、端部を摘み上げる。色調は黒褐色を呈する。28～37は口縁部が緩やかに外反し、端部を小さく摘み上げる。28は指頭圧痕が残る。内外面に油煙が付着する。29は器壁が薄い。30は摘み上げた端部が尖る。内面に油煙が付着する。31は丸底風である。端部内面が浅く凹む。外面に油煙が付着する。32は端部の摘み上げがごく弱い。内外面に油煙が付着する。33は器壁が薄い。34は端部の摘み上げがやや強い。35は底部に向かうにしたがい厚みが減じる。36は内外面ともに撫で痕が明瞭



第13図 20-1・2トレンチ出土遺物実測図



第14図 20-3トレンチ出土遺物実測図（1）



第15図 20-3トレンチ出土遺物実測図 (2)

に残る。内外面に油煙が付着する。37は内外面に多量の油煙が付着する。38は口縁がわずかに外反し、端部は丸い。39は口縁部がほぼ直線的に立ち上がる。40は口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味である。撫で幅が短い。41は口縁部が緩やかに外反する。端部外面を面取りする。42は口縁部が外反し、端部は尖り気味である。指頭圧痕が残る。43は口縁端部内面が強く撫でられることによりやや凹む。端部は丸い。44は口縁部が外反する。端部内外面の全体に油煙が付着する。45～47は口縁部が外反し、端部を小さく摘み上げる。47は口径16cmを超えると推定される大型品である。

48・49は須恵器である。48は甕で外面は平行叩き目文、内面は同心円当て具痕が残る。49は瓶類の口縁部と考えられる。端部外面が三角形状に突出する。50・51は珠洲の甕である。51は外面上部にわずかに叩き目がみられる。52は瀬戸美濃の皿である。見込みに菊の印花を押捺する。内面と外底面に灰釉を施す。53は瀬戸美濃の天目茶碗である。体部から屈曲して口縁を外に引き出す形態である。内面と外面上部に鉄釉を施す。54は瀬戸美濃の塊である。削り出し高台である。内外面全体に錫釉を施す。55は瀬戸美濃の塊である。緩やかに内湾している。鉄釉を施す。56は瀬戸美濃の壺である。鉄釉を施す。57～60は越中瀬戸の擂鉢である。いずれも錫釉を施す。57・58は口縁内面に凸帯を形成する。凸帯の中央は浅く凹む。59も口縁内面に凸帯を形成するが、57・58に比べて張り出しが弱い。単口一单位は幅約3cm、13条である。60は外面に凸帯が形成される。凸帯の中央は浅く凹む。注口を指でおさえて小さく作出している。61は越中瀬戸の壺底部である。内面のロクロ撫でが明瞭である。62は生産地不明の陶器の小杯で、口縁部が外反する。削り込み高台である。胎土は硬質で灰白色を呈する。薄く鉄釉がかかる。63は白磁の丸皿である。高台の内側は垂直に、外側は端部を斜めに削り出す。高台下部には砂が付着する。全体に白色透明の釉がかかり、胎土は白色である。64は青磁の皿である。口縁部が大きく屈曲して外反する。口縁端部は波状に削る。釉は淡い緑色で、高台内は透明釉である。胎土は白色を呈する。65は青花である。高台は内側を垂直に外側は端部を斜めに削る。高台下面は無釉である。見込みに十字花文がある。66・67は鉄製品である。全体的に錫が厚い。66は釘の可能性が高い。67はやや扁平である。68は銅製品とみられる。板状の銅を丸めて棒状としている。69は羽口である。70は铸造鋳とみられる。断面は気泡が多く、裏面はガラス質化する。

## 第4章 石垣測量調査

### 第1節 調査の経緯と目的

富山城石垣は、これまでの研究で、慶長10（1605）年、前田利長により初期石垣が整備され、慶長14（1609）年の大火で焼失荒廃後、富山藩が寛文元（1661）年から修築して現在に至ると考えられる。富山藩修築の際には慶長期石垣の築石を再利用するとともに、一部新石を補充して積替えを行ったとみられる。

その後度重なる天災により、石垣は各所において崩壊・積直しを繰り返しており、明治～昭和期に大幅な積直しが行われ、ほぼ現在の姿になったとみられる。

現在の石垣は、不適切な近代的積直しによる孕み出し、石垣上の樹根の肥大化による孕み出し、戦時中の焼夷弾の集中投下類焼による被害が随所に見られ、痛みが激しい。

富山市建設部公園緑地課では石垣築石の定点観測を複数年にわたって行い、危険度判定により危険度の高い部分から積直しを計画した。これに先立ち、石垣の文化財的保護の観点から、対象石垣を現況測量する必要が生じたため、平成14年度末から順次測量調査を開始することとした。

測量は、地上型スキャナ式レーザースキャナーによる三次元計測を採用した。これは積直しの際の立体的復元に対応できる手法を検討した結果選択した測量方法である。

調査は測量成果図の作成を主目的とし、またそれに基づき、個別の石材における表面観察から、石材・刻印・表面加工などの調査を行い、結果をまとめた。

### 第2節 三次元レーザー測量の詳細

石垣測量は以下の測量内容とした。

①平成14～20年度の年度別計測方法は第1表の通りである。

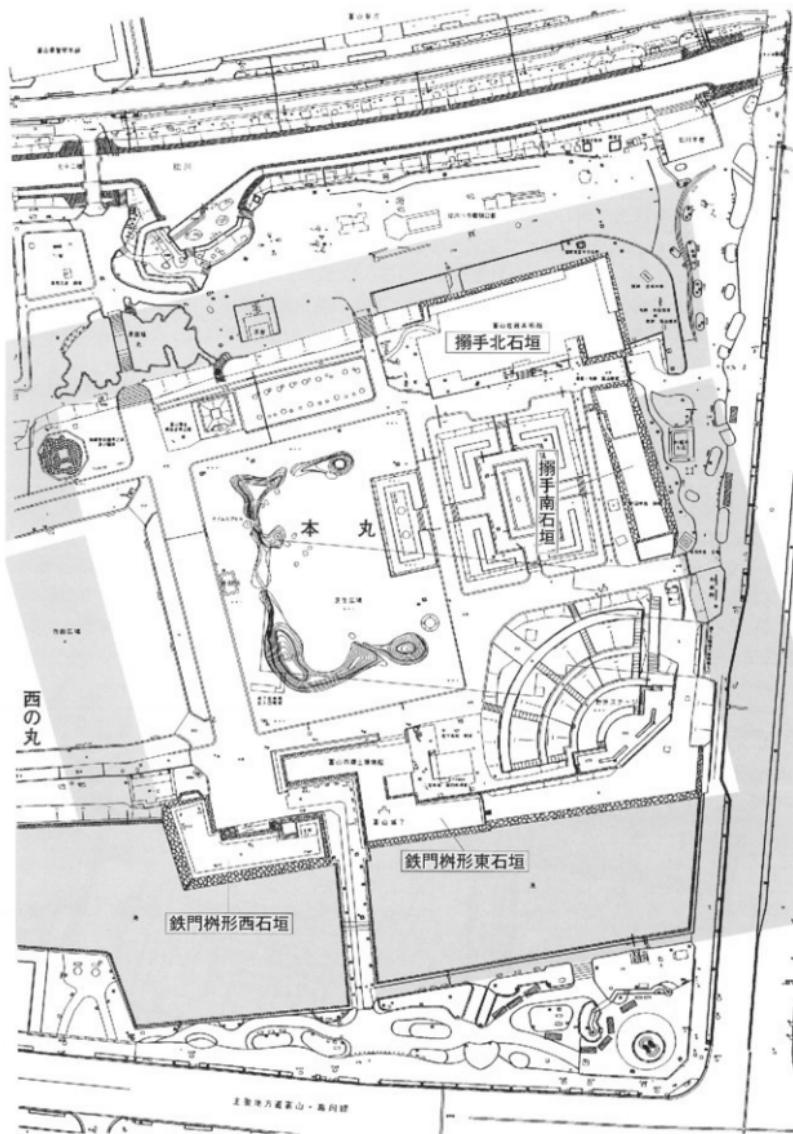
第1表 石垣年度別計測一覧

年度	計測石垣	使用三次元 レーザー機器	計測ピッチ	計測方法
14	本丸鉄門彫形西石垣東端面・ 東面・北面（合坂面）	T D S-130 L	10mm以下	正対計測
15	本丸鉄門彫形西石垣北端面・ 南面・西面、本丸搦手舟形南石垣北面	T D S-130 L + G S 200	6~7mm以下	正対計測・複数方向
16	本丸搦手舟石垣東面北部	G S 200 + T D S-130 L	6mm以下	複数方向
18	本丸搦手舟石垣東面南部・土橋面、 本丸搦手外舟形東面・北面	G S 200	6mm以下	複数方向
19	搦手舟石垣西面中央・南合坂面、 搦手舟北石垣北面中央、 搦手舟外舟形石垣北面西半	G S 200	6mm以下	正対計測・複数方向
20	搦手舟北石垣東面	H D S 3000	6mm以下	正対計測

#### ②レーザー測量機器性能

以下の機器・方式によって計測を行った。

使用機器 Leica Geosystems社製HDS3000（1~200m巾距離用）



第16図 本丸石垣位置図 (1:1,200) アミは内堀

計測方式 タイム・オブ・フライト方式

レーザー光 半導体レーザー、波長532nm（緑色） スポット径 6.0mm未満/50m

計測データ 三次元データ（X、Y、Z） 反射照度・RGBカラー

使用ソフトは次の通りである。

ソフト名 Leica Geosystems社製Cyclone5.5

処理内容 計測点群の合成・座標系の変換・面の発生・3Dモデリング

### 第3節 石垣区分

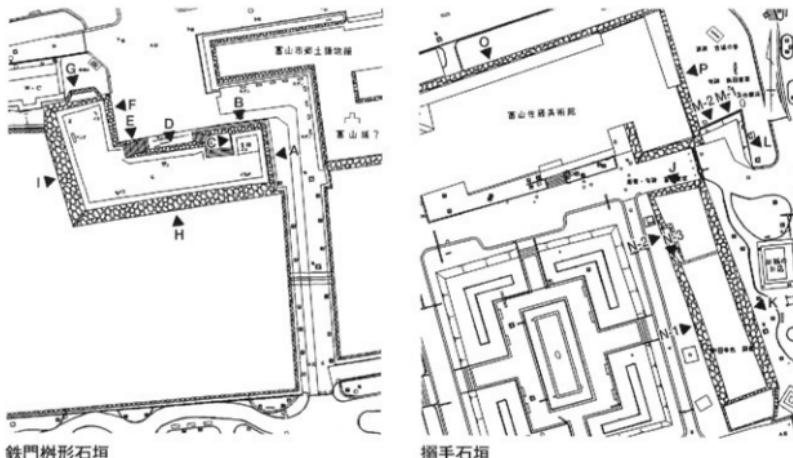
平成14年度から平成20年度までで計測面16地点23面のレーザー測量を行った。測量延べ面積は実測で1555.3m<sup>2</sup>である。年度毎の測量箇所及び面積は第2表のとおりである。これまでの各石垣の測量成果は、便宜的にA～O面と呼称して報告している（富山市教委2007・2008）。これに続けて、今年度の測量報告箇所をP面とする。P面の測量は、平成20年8月～12月に行った。測量の経過は第1章第3節に記した。

なお、P面の一部は平成19年12月～平成20年3月にも測量を行っているため、以下の検討にあたってはその範囲の図面も合成して測量図に示している。

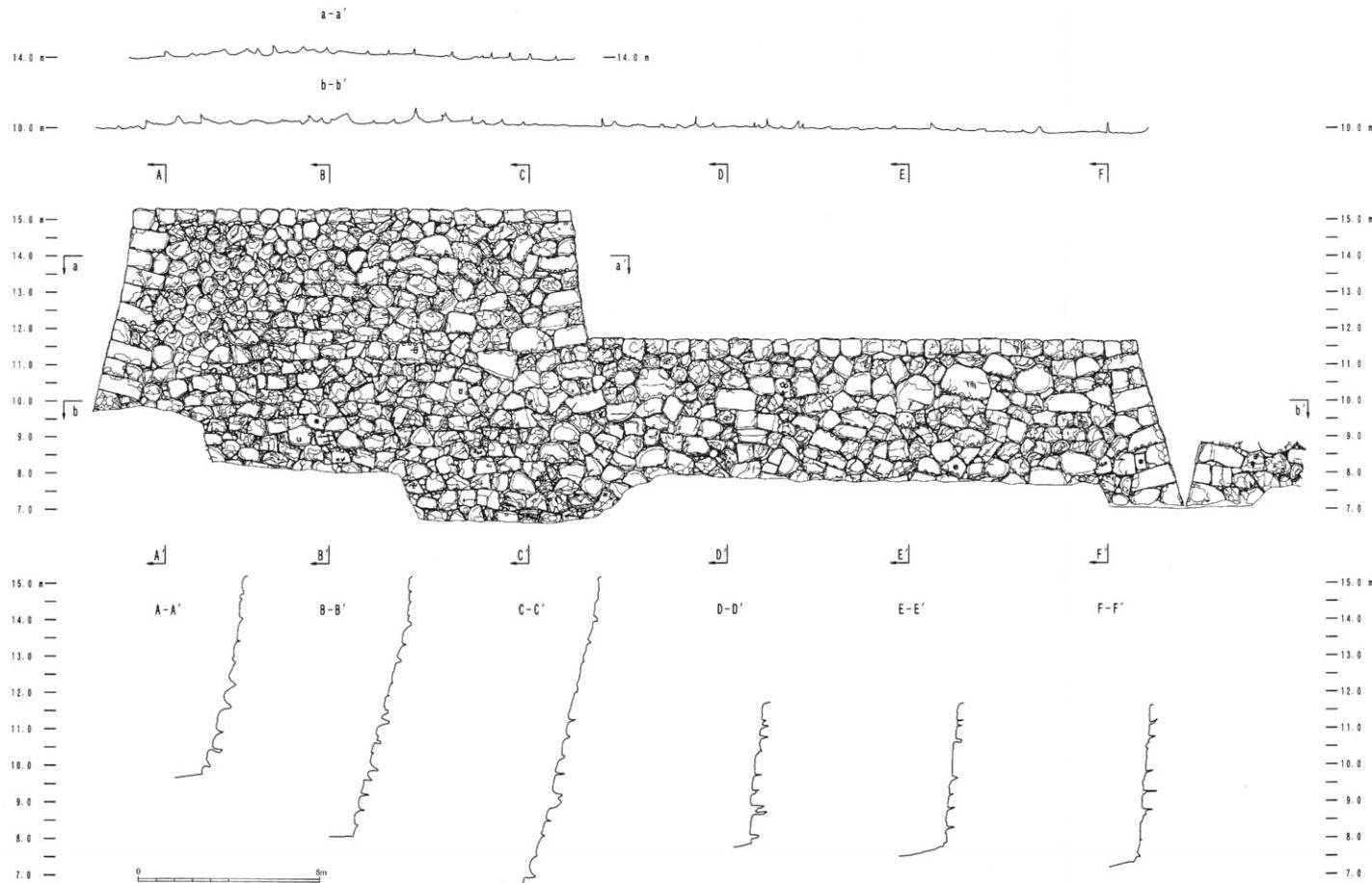
### 第4節 測量図に基づく調査項目

以下の7項目について、表面観察による調査を行った。過去に測量を行った石垣面の一部は、平成19年度に富山市が行った石垣修理に伴う解体調査の成果も加味して成果を示している。

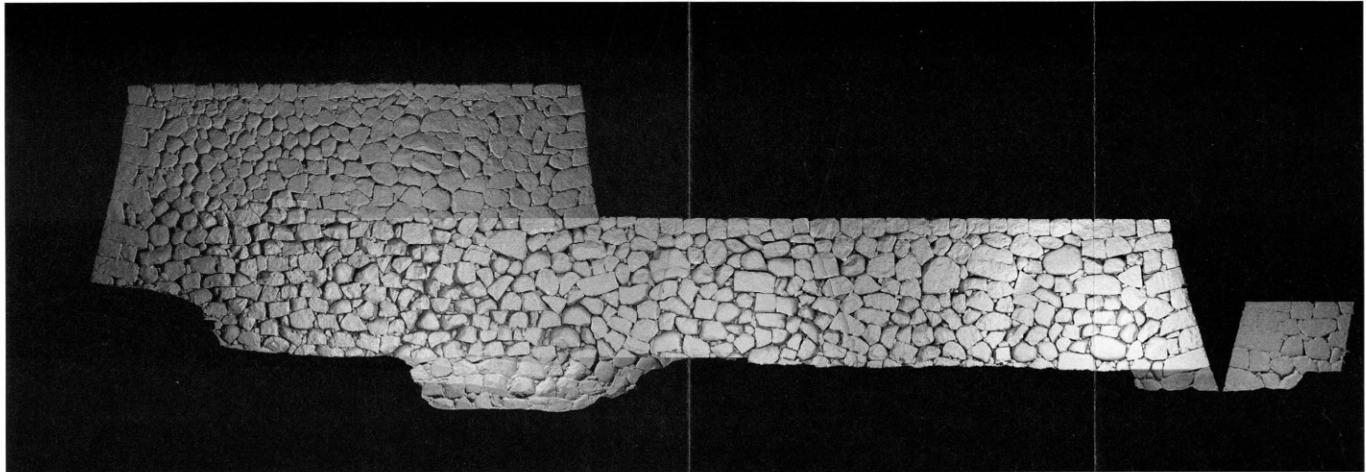
①石垣の年代と石積の特徴 富山城で採用されている石積には、布積・乱積（落積）・鏡積がある。特に鏡石の存在する鉄門石垣門前通路面を中心に、横積され大面を石面とする特殊な積み方が認められる。このほか、角石や角脇石の横石に横積の石が配置される。搦手石垣は近代の改変が多く、また搦手南石垣西面は主として玉石積となっており、コンクリート補修も行われている。



第17図 石垣測量区分図（1:1,000）



第18図 P面石垣測量図



第19図 P面石垣点群データ図

第2表 計測各石垣面の位置・面積

面	石垣名稱	所在場所	実測面積
A	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 東面1(櫓台東面)	76.0m <sup>2</sup>
B	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 北面1(櫓台北面)	60.5m <sup>2</sup> +雁木面10.5m <sup>2</sup>
C	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 西面1(櫓台西面)	6.5m <sup>2</sup> +東相坂面6.0m <sup>2</sup>
D	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 北面2(合坂間)	73.4m <sup>2</sup> +試掘部分1.1m <sup>2</sup>
E	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 北面3(西合坂台)	21.5m <sup>2</sup> +西合坂面14.0m <sup>2</sup>
F	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 東面2	51.5m <sup>2</sup>
G	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 北端面(ハバキ面)	42m <sup>2</sup> +ハバキ面23.0m <sup>2</sup>
H	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 南面(堀面)	315.0m <sup>2</sup>
I	本丸鉄門枠形石垣	西石垣 西面2(堀面)	175.5m <sup>2</sup>
J	本丸搦手石垣	南石垣 北面	58.0m <sup>2</sup>
K	本丸搦手石垣	南石垣 東面	261m <sup>2</sup> +試掘部分2.8m <sup>2</sup>
L	本丸搦手外枠形虎口	東面石垣(旧堀面)	8.5m <sup>2</sup> +試掘部分7.5m <sup>2</sup>
M-1	本丸搦手外枠形虎口	北面石垣(旧堀面) 東半	6.0m <sup>2</sup> +試掘部分5.0m <sup>2</sup>
M-2		北面石垣(旧堀面) 西半	2.5m <sup>2</sup>
N-1		南石垣 西面	110.5m <sup>2</sup> +試掘部分6.5m <sup>2</sup>
N-2	本丸搦手右垣	南石垣 西面(合坂間)	10.0m <sup>2</sup>
N-3		南石垣 南合坂面	3.5m <sup>2</sup>
O	本丸搦手石垣	北石垣 北面	25.5m <sup>2</sup> +試掘部分8.5m <sup>2</sup>
P	本丸搦手石垣	北石垣 東面(北面の一部含む)	153.0m <sup>2</sup> +試掘部分10.0m <sup>2</sup>

②石材 石垣築石の多くは結晶の大きな花崗岩である。次いで安山岩、石灰質砂岩の順で多く、ほかに流紋岩等がある。流紋岩等の石材は白色系統のものを中心いて選択されている。調査は、花崗岩・安山岩・砂岩・その他に4区分し、肉眼表面観察により一石毎に判定した。解説の図面（第20～22図）は、安山岩・砂岩・その他の3種を作成した。図示以外のものはすべて花崗岩である。

③築石種別 築石の多くは川原石の割石を使用しているが、川原石をほとんど加工せず玉石のまま築石として使用しているものがある。特に搦手南石垣西面（N面）に多い。

④近代新補石 明治以降に取替え・追加されたとみられる玉石・割石が、平石及びハバキ石等に使用されている。神通川産とみられる長石を多く含む安山岩系石材が主体であり、このほか安山岩、花崗岩系・流紋岩系石材がある。割石の一部には豆矢と呼ばれる小型の穴が認められ、識別のメルクマールとなる。また江戸期に調達された石材のうち、主として安山岩玉石を再加工（2分割）したものも存在しており、これを含めた。

⑤刻印 石面の刻印及び表面から目視される内側の刻印を確認した。刻印には大型と小型のものがあり、小型が主体である。刻印は石面に行われるものが多いが、自然石面に残すものもある。石面の刻印は必要に応じて計測・拓本を行い、スケールをあててデジタル撮影した。

⑥勾配・断面形 石垣の勾配と断面形を確認した。

⑦修理範囲 各石垣面において目地の変化、近代新補石などから総合的に判断される積直し痕跡を探るものである。なお、天端から1・2段は近現代に積直しを行っている箇所が多い。

## 第5節 測量調査成果

本節では、P面石垣の測量図（1/100）を第18図に示し調査成果を解説する。測量図を作成する際の基本図とした点群データ図も第19図にあわせて示した。また、調査項目毎に石垣面の状況を1/200縮小図により第20～26図に示す。

なお、本面の詳しい検討は第5章第3節で行うため、ここでは事実記載を中心とする。

調査項目は次の7項目である。①石垣の年代と石積の特徴、②石材、③築石種別、④近代新補石、⑤刻印、⑥勾配・断面形、⑦修理跡である。調査項目に対応する築石については、黒く塗り潰して表示することとする。なお、測量図には北面の一部も示したが、ここでは純粋にP面（東面）のみのデータを把握するため、該当する築石の数量を記す際に北面は含めていない。図面は向かって左手が南、右手が北である。

①石垣の年代と石積の特徴（第18・19図） P面は本丸搦手北石垣の東面である。石垣上には現在、佐藤記念美術館が建つ。ここは元来内堀面であったが、内堀は埋め立てられ、石垣面は現在、南部は高さ約7m、天端幅約12m、北部は低くなつて高さ約4m、天端幅約15mが地上にみえる。南部の下部には搦手外拵形石垣（M面）が直交して接する。

南部の石垣は、下部に山形に布積状の石積（後述のⅠ期）がみえる。上部や北部とは積み方が明らかに異なつていて、肉眼でも明瞭に観察できる。この山形の石積のうち上部と下部は比較的きれいに横目地が通るが、中央付近でやや乱れる箇所がある。布積は大手筋の本丸鉄門拵形石垣の通路面（A面・B面）にみられ、寛文期と推定されている（富山市教委2007）。ただし、本面はA・B面ほど整った布積とはなっていない。

石垣南部の上部および北部は、全体的に乱積で部分的に落積もみられる。近代の新補石も多く、近代以降に改修が行われていることが確実である。なお、石垣南部の上部南側（後述のⅡ期）は玉石が多用されており、様相が異なる。

②石材（第20～22図） 640石中、386石（60.3%）が花崗岩である。安山岩は243石（38.0%）で、この両者で98%以上を占める。他に砂岩が1石（0.16%）ある。その他の石材は10石（1.6%）あり、流紋岩、閃緑岩、疊岩等がある。花崗岩以外の石材は、石垣の上部に多くみられる。

③築石種別（第23図） 割石主体である。全640石中、割石は603石（94.2%）、玉石は39石（5.8%）である。注意されるのは、後述するⅠ期部分の割石は、方形を意識した粗加工割石が多用されていることである。大きさも50～60cm前後の小ぶりなものが多く、他の箇所の築石とは異なる。

④近代新補石（第24図） 小型矢穴（豆矢）があるものを中心にして認定した。石垣上部に散見される。安山岩の新石が主体である。

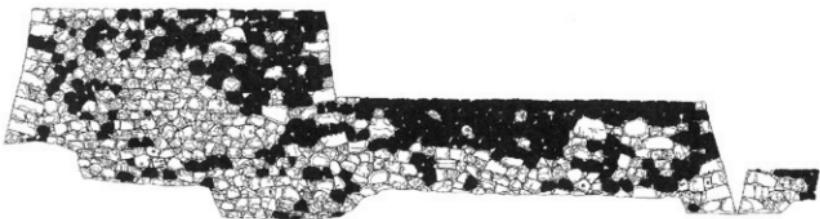
⑤刻印（第25図） 石垣中～下部に多く、23石にみられる。そのうち一石に2種類の刻印があるものが4石ある。石面全体に刻まれた「井」？字状の大型刻印も1石みられる。

⑥勾配・断面形（第18図） 石垣南部の勾配は75～76°である。一方、北部は85°という急勾配である。また、水平方向の断面についてもみると、標高10mラインでは、北部では一直線であるが、南部で若干弧状になる。また、標高14mラインでは、緩やかに逆V字形となっている。ラインの変換点は、後述する修理の跡には対応する。

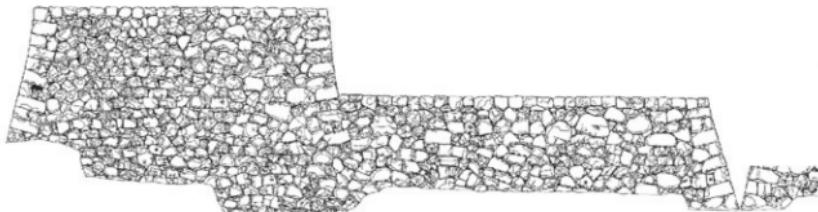
さらに断面の観察で注意されるのは、①石垣の年代と石積の特徴で指摘した布積状となる部分は、築石間の空隙が多く、石面も不並びであるが、近代以降とした南部上部や北部は空隙が少なく、石面が繕っている。こうしたことでも時期の違いを示すものであろう。

⑦修理跡（第26図） 4期に分かれると考えられる。

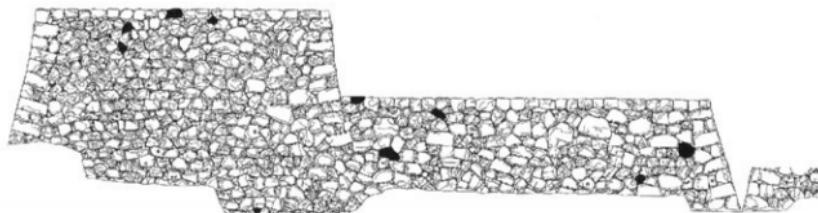
Ⅰ期は南部の山形の石積である。布積を特徴とする。Ⅱ期は南部の上南半部である。玉石あるいは安山岩の端部を割った築石を多用するのが特徴である。Ⅲ期は北部の下部を中心とした範囲である。これはⅣ期と石の積み方に大きな違いはないものの、石材や近代新補石の使用に明らかな違いがあるため分けた。Ⅱ期とⅢ期の前後関係は切り合がないため厳密には不明である。Ⅳ期は、築石に安山岩が多く、安山岩の近代新補石も多用される。



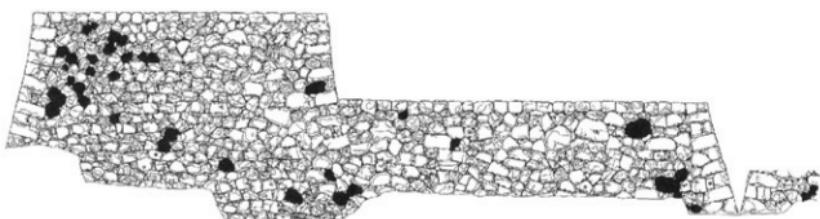
第20図 安山岩石材分布図



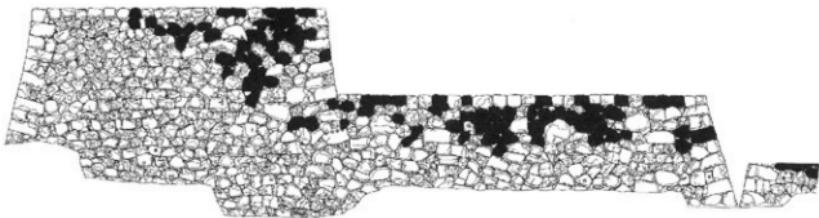
第21図 砂岩石材分布図



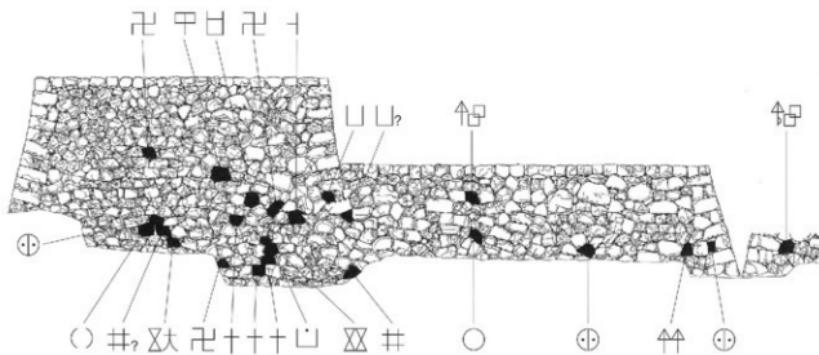
第22図 その他石材分布図



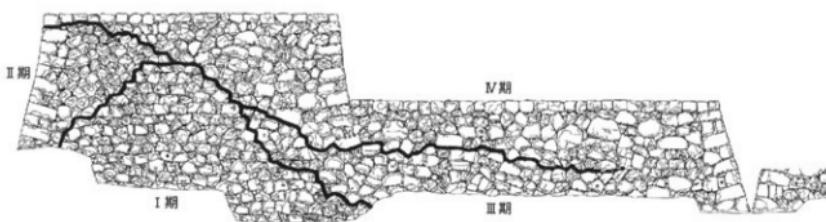
第23図 玉石分布図



第24図 新代新補石分布図



第25図 刻印分布図



第26図 修理跡

0 10m

## 第5章 総 括

### 第1節 20-3トレンチ検出の井戸SE1と富山城内の井戸について

20-3トレンチで井戸とみられる遺構(SE1)を検出した。富山城内で井戸を検出したのは初めてである。本節ではSE1と富山城内における井戸について検討したい。

**井戸の根拠** 第3章の内容と重複するが、最初にSE1を井戸とした根拠を述べておく。当初はかなり大規模な遺構であることが予想されたため戦国期の堀の可能性を考えた。西側で調査した16-2トレンチで東西方向に延びる戦国期の堀が検出されており(富山市教委2006)、これに続く遺構と考えたのである。しかし、調査を進めていく過程で南北に弧状のプランが見えてきた。廃棄土坑のような遺構も考えたが、垂直に近い角度で掘り込むことやかなりの深さがあることから最終的に井戸とするのが妥当と判断したものである。

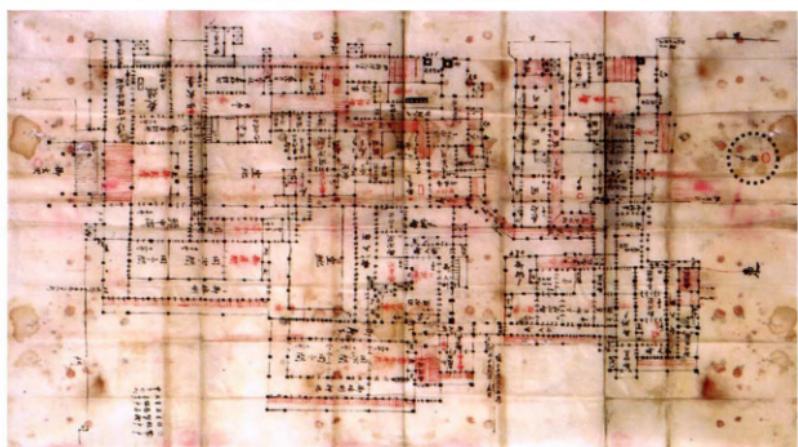
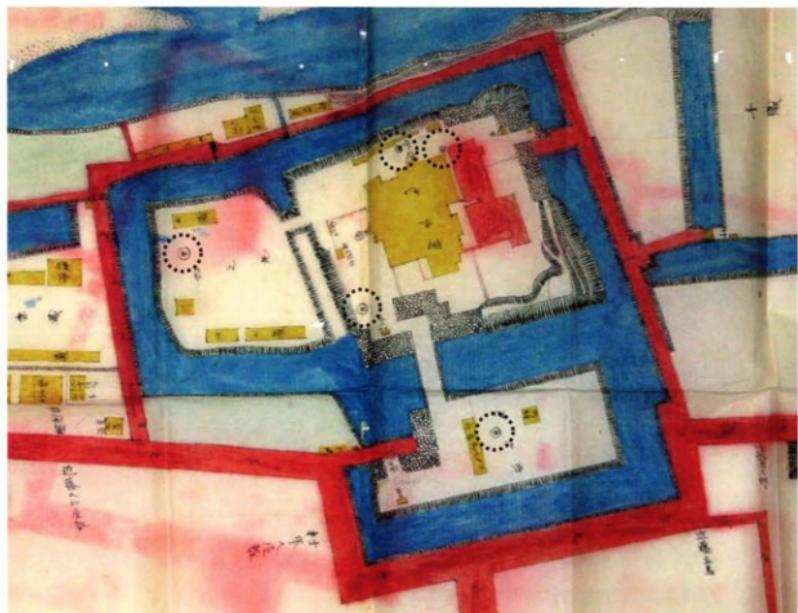
覆土から出土する遺物の時期は、16世紀後半～17世紀初めと考えられる。したがって井戸の掘削・使用年代は16世紀中頃の中世富山城成立期に遡る可能性が高い。

**構造と類例** 北壁断面をみると、段状に掘り込まれている様子が看取できる。調査では標高8.0～8.2mで明確な遺構プランを確認した。これは2段目の掘り込みに相当するレベルである。ごく一部しか検出していないので規模は大雑把な推定となるが、2段目の径はおよそ直径3.6mである。この2段目の掘り込みの規模から、1段目の掘り込み(遺構検出面)の規模を推測すると、直径約5.4mとなる。これだけ大規模な掘り方を掘削していることから、下部に何らかの井戸側が存在した可能性が高い。調査では井戸側の痕跡は確認していないため、井戸側が存在するならさらに下層にあると思われる。後述する富山城下町の調査では、井戸側が抜き取られた例があるため、本遺構も抜き取りの可能性がある。今回掘削したのは、井戸掘り方の上層部分と考えられよう。

富山城内の井戸の検出は今回が初めてであるが、城下町では調査例がある。これらを参考にSE1の構造を検討したい。城下町の調査は、市街地再開発事業に伴い、現在の「大和」やその隣の立体駐車場「グランドパーキング」建設地等で行われている(富山市教委2005、総曲輪通り南地区市街地再開発組合ほか2006、堀内2008)。これらの調査で計9基の近世の井戸が検出された(※以後、これらの井戸を「2005-SE01」のように各報告書の年度一遺構番号で記す)。このうち3基は井戸側が抜き取られた可能性が指摘されている。明確な井戸側が確認されたのは、2005-SE02、2008-SE01である(第27図)。いずれも樋積上げ井戸である。後者は、上部が削平されているので掘り方の様相は不明だが、前者は、2.5m×2.25mの楕円形の掘り方を持ち、深さは2.95mある。なお、2005-SE02とほぼ同時期の2005-SE01は、4.4m×3.4mの楕円形の掘り方を持ち、掘り方は最初斜めに掘り込んだ後、やや水平となり、その後、さらに垂直に近い角度で落ち込む(第27図)。段状に掘削する



第27図 富山城下町検出の井戸(富山市教委2005、堀内2008)



第28図 前田利同城囲の図（部分）（上）と越中富山御城御絵図（下）（丸点線が井戸の位置）  
(富山市郷土博物館蔵)

掘り方は本遺構と同様である。時期は2005—SE02・SE01が17世紀第二四半期、2008—SE01が17世紀第二四半期～第三四半期とされている。16世紀後半～17世紀初め頃の遺物を出土するSE1とはやや開きがあるが、いずれも大規模な掘り方を掘削し、掘削方法も類似するものがあることは留意される。SE1も同様の構造であった可能性がある。

**廃絶の時期** 出土遺物から判断すると、SE1は16世紀後半から17世紀初めの間に埋没した可能性が高い。慶長10（1605）年に前田利長により大規模な改修が行われ、富山城が近世城郭として整備されることから、井戸はこれに伴って廃絶された可能性が考えられる。

**絵図にみられる井戸** 最後にSE1と時期は異なるが、関連する問題として絵図に描かれた城内の井戸について検討する。

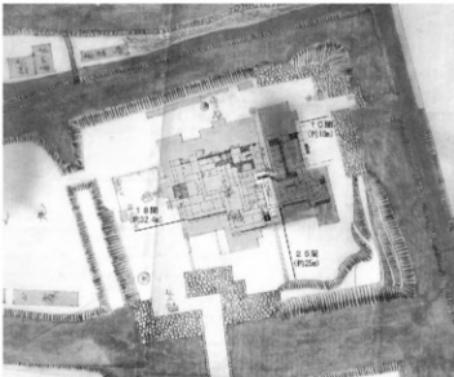
富山城の絵図のうち、幕末期（慶応末年頃）を描いた「前田利同城囲の図」（以下、「城囲図」とする）には、本丸に3ヶ所、西の丸に1ヶ所、二の丸に1ヶ所井戸を示すマークがある（第28図上）。

一方、天保6（1835）年の「越中富山御城御絵図」（以下、「御城図」とする）は、本丸御殿内の間取りが詳しく描かれる（第28図下）。この図では御殿の東側に井戸が1基ある。しかし、この絵図では石垣等の外部施設が描かれていないため井戸が本丸のどの位置に当たるかが不明である。したがって、まずこの御殿自体が本丸のどの位置に当たるかを検討し、その結果から井戸の位置を推測したい。

御城図は、石垣等は描かれていが、石垣や土手からの距離を記した記述がみられる。たとえば東では「此角より石垣際迄十軒」、南では「堀土手際迄廿五軒」、西は「此際より土手際迄十八軒」といった具合である。これを手がかりにすると、本丸の中における御殿の位置がおおよそわかる。これによつて城囲図に御城図の御殿の位置を重ね合わせたものが第29図である。これによると、両図の御殿は南北幅が大きく異なる。両図は約30年の時期差があるので、両図の間に増築や改築があったと考えられなくもないが、建物の輪郭は凹凸の具合がよく似ていて、その可能性は低い。細かい修築はともかくとして、天保6年と慶応末年の間で建物に大きな変更はないと考えたい。そうすると、いずれかの図あるいは両方の図に伸縮の間違いがあると考えられる。城囲図は、本丸内における御殿の位置を石垣等との位置関係を踏まえながら描いたと推測されるため、より実態に近いのではないかとも思うが、断定はできない。

御城図にみられる井戸の位置は、御殿の北東部東面にある凸部（御殿の裏手出入入口）の東側である。この位置関係を城囲図にあてはめると、井戸は掘手南石垣の北西隅角付近に位置することになり、今回検出したSE1とはほど近い場所になる。こうした作業が成り立つのは、先述の両図の伸縮の問題において、城囲図の方が正しく描かれているという前提によつた場合である。仮に御城図の御殿の位置の方が正しい場合でも、検出したSE1とはそれほど離れた場所にはならない。

上述したようにSE1は16世紀後半～17世紀初めに埋没した井戸なので、19世



第29図 前田利同城囲の図と越中富山御城御絵図の重ね合わせ図（富山市郷土博物館作成）

紀の御城図に描かれた井戸とは別物である。しかし、両時期に井戸が同じような場所に設けられていることは注意される。この付近が伝統的に井戸を設置するのに適した場所であった可能性がある。背景に掘削が容易なことや水が湧きやすいといった要因があったのかもしれない。

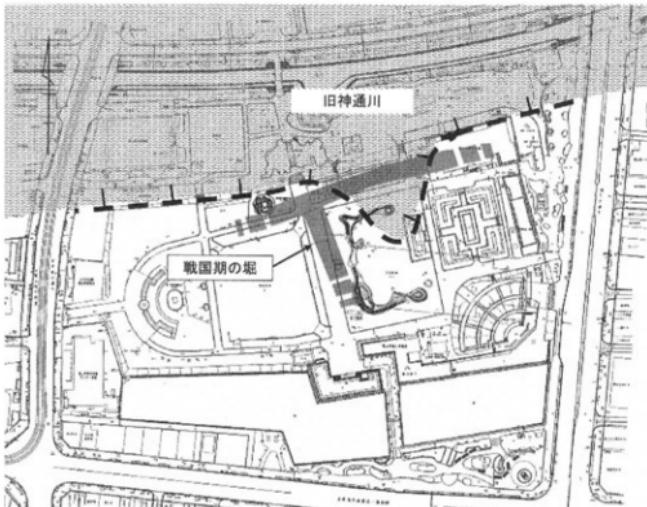
## 第2節 本丸北部の旧地形について

本節では本丸北部における旧地形を検討する。

今回の20-1トレーニング、20-3トレーニングの調査で地山とみられる土層を確認した。20-1トレーニングでは標高約8.4mで黄褐色砂、20-3トレーニングでは標高約7.7mで黄褐色土が検出されている。今年度以外の調査では、20-1トレーニング北西の15-2トレーニングでは標高8.74mの灰オリーブ色細砂土が地山とされている（富山市教委2004）。また、本丸の範囲外となるが、さらに西の15-3トレーニングでは標高約7.8mで黄灰色砂の地山が出ている（富山市教委2004）。

以上の地山レベルから判断すると、本丸北部の旧地形は、15-2トレーニング付近が最高所であったことがわかる。ここは本丸の北西部に当たる。15-2トレーニングを基点に西側に低くなることがすでに指摘されている（富山市教委2004）が、今年度までの調査も含めると東にも低くなることがわかる。さらに、地山の土層に注目すると、15-3、15-2、20-1トレーニングが砂質、20-3トレーニングが黄褐色土となり、全体的には西側が砂質、東側が通常の土質という関係がみえる。ただし、20-3トレーニングは黄褐色土の下に黄褐色・灰白色粗砂（62層）がある。したがって、現在砂質地山である箇所も元々は黄褐色土が被っており、後世に削平された可能性も考えられる。

以上のような地形が推定されるなかで、今回20-2トレーニングでは地山を検出していない。東西の20-1トレーニング、20-3トレーニングで検出した地山レベルから推測すると、標高8m前後で検出されると考えられたが、標高6.85mまで掘削しても未検出であった。また、20-2トレーニングのすぐ西に位置す



第30図 本丸北部周辺の旧地形の推定 (1:3,000)

る18-4トレンチで地山とされていた褐色・黄色砂質土（富山市教委2007）は、20-2トレンチの25層に対応すると推測され、地山ではないと考えられる。したがって、18-4トレンチでも地山はより深い地点で確認される可能性が高い。こうしたことから20-2トレンチや18-4トレンチ付近は、大きく谷状に落ち込む地形があった可能性が高い。谷状地形の中から古代の遺物が出土しており、古代以前はこうした地形であったと考えられる。

富山城の北は明治時代まで神通川が流れていた。神通川の氾濫等によってこうした谷状地形が形成されたと考えられる。本丸内の砂質土も川の作用により堆積したものであろう。

また、松川と本丸の間に位置し、現在児童公園や市立図書館が建つ場所は、江戸期～近代にかけて内堀と築堤が存在していた。19-3トレンチの調査では築堤盛土の下から川原石が確認されている（富山市教委2008）。築堤や内堀が構築される前はこの場所も旧神通川の川縁、あるいは川原のような場所であったのだろう。

富山城は旧神通川縁の自然堤防上を利用して築いている。本丸から北（旧神通川側）へ向かう落ち込みは現在ではほぼ東西一直線だが、古代以前は谷状に入り組んだ地形を呈していたとみられる（第30図）。古代以前にあったこうした谷状地形は、中世富山城築城の際に大規模に埋立て造成され、その後、城の整備が行われたのであろう。このことは谷状地形の中に入る16-2トレンチで、戦国期の東西方向の堀が見つかっている（富山市教委2004）ことからも裏付けられる。

### 第3節 P面石垣の測量調査の考察

A～O面までの石垣測量は、過去の調査報告書に成果・考察を示した（富山市教委2007・2008）。ここでは第4章で報告したP面石垣測量の成果に基づいて考察を行いたい。

第4章にも記したように、P面南部は山形に布積状の石積（I期）がみられる。布積は大手筋の本丸鉄門襤形石垣の通路面等（A面・B面）でみられる。A面・B面は、寛文初年の富山藩改修期の原型をほぼ留めると指摘されている（富山市教委2007）。ただし、本面の石積はA面・B面ほど整っていない。目地の通りがやや乱れた箇所がみられる。こうした違いが生じている要因は、まずA面・B面が築石の大きさの均一度が高く、形もほぼ方形で整っているのに対し、本面の築石は大きさや形が不揃いなことにある。途中にいびつな築石が入ることで、水平ラインの目地に乱れが生じているのである。また、A面・B面が割石のみで構成されるのに比べ、P面は玉石が散見されることも異なる。

こうした違いがあるにせよ、明らかに布積を意識している点は注意される。A・B面との比較で、布積の乱れを時期差と捉えるなら、寛文期からそれほど降らない時期で、伝統的な石積技法が意識されていた頃の直しとなる。しかし、寛文期の後、石垣築造に金沢穴生が関与する史料はみられず、寛文期後に果たしてI期にみられるような伝統的な石積技法が使われたかどうか疑わしい。したがって、P面にみえる布積は、A・B面と同様、寛文期の石積ではないかと思われる。布積に乱れがあるのは、城の裏側に当たる搦手は見栄えを重視しなかったためという可能性が考えられる。

以上のP面南部の石垣に対し、P面北部に当たる搦手北石垣北東隅角部付近は、絵図や写真で崩落している様子が看取でき、明らかに新しい時期の石積である。例えば、絵図では慶応末年頃を描いた「越中國城主前田利同城図」（第28図上）、明治26年の「富山市街実測図」がある（第31図）。明治40年頃撮影（中村1993）の写真（第32図）は内堀の北東角から西方向を撮影したものだが、石垣北東隅角に当たる手前左手が崩れたようになっている。したがって、幕末から明治にかけて当該地の石垣は崩れた状態であったことがわかる。それ以前の天明～安政期の絵図や嘉永7年の絵図に崩落の表現はみえないから、崩落したのは安政期から慶応末年の間となる。この間で石垣が崩落する出来事と

いえば、安政5（1858）年の大地震が最も可能性が高い。この崩落状態は昭和36（1961）年の佐藤記念美術館建設時まで放置されていたようである。

ところで、第33図は昭和29（1954）年に開催された富山産業大博覧会の直前頃を写した写真である。富山城の北東側から本丸方向を撮影している。写真中央右に見える部分が今回測量したP面石垣である。これをみると、P面の北部（写真右手）にあたる箇所が大きく崩れている。安政の大地震による崩落後は、こうした状態で放置されていたのであろう。問題となるのは、この崩落がどの修理跡に対応するかということである。一見、Ⅲ期とⅣ基の間のライン（第26図）に相当するように見える。しかし、写真の石垣は、搦手北石垣と南石垣の間の通路面と石垣地表面の高さ（搦手虎口の高さに相当）が現在よりも高くみえる。つまり、写真は現在より石垣がより多く地表に露出した状態と考えられるのである。高くなっているのは、下部がより多く露出していることによる。そうであるならば、現在は地中に埋まっている部分が写真では見えていくことになり、写真の崩落ラインはⅠ期とⅢ期の間に対応しそうである。

したがって、Ⅲ期とⅣ期の石積は少なくとも昭和29年以降、おそらくは佐藤記念美術館建設時に積まれたと考えられる。Ⅲ期とⅣ期は石積の時期に違いはないであろう。両者で近代新補石の使用に違いがあるのは、最初に元々あった築石を使用して積み、その不足分に補石を利用したためであろう。このときには、写真では残っている石垣南部の上部が、十分な強度を持つよう一度解体され積直されたと考えられる。したがって、Ⅱ期もおそらくⅢ・Ⅳ期とほぼ同じ頃の積直しと思われる。

以上をまとめると、P面石垣のうち北部と南部の上部にあたるⅡ～Ⅳ期は昭和期の石積である。Ⅰ期については富山城で数少ない江戸期の石積を留めていると考えられる。しかも時期は富山藩初期の寛文期に遡る可能性が想定される。



第31図 明治26年富山市街実測図（部分）  
(富山市郷土博物館蔵)



第32図 明治40年頃の北東部内堀  
(富山市郷土博物館蔵)



第33図 昭和29年の石垣写真（部分）  
(富山市郷土博物館蔵)

## 引用・参考文献

- 家田淳一 2000「陶器の編年」「九州陶磁の編年」 九州近世陶磁学会
- 大橋康二 1988『肥前陶磁』 ニューサイエンス社
- 小野正敏 1982「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会
- 加藤達行 2004「富山城の破却について」「富山市の遺跡物語』No5 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 加藤達行・古川知明 2004「中世富山城の考古学的調査に基づく考察」「富山史壇』第142・143合併号 越中史壇会
- 久保尚文 1983『越中中世史の研究 室町・戦国時代』 桂書房
- 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』
- 佐伯哲也 1992「神保氏の重要な拠点(2)」「越中の中世城郭』第2号 富山の城を考える会
- 佐伯哲也 2004「中世富山城について」「富山城跡試掘確認調査報告書」 富山市教育委員会
- 絶曲輪通り南地区市街地再開発組合・富山市教育委員会 2006「富山城跡発掘調査報告書—絶曲輪通り南地区第一種市街地再開発事業に伴う富山城下町の発掘調査報告書—」
- 高岡 徹 1980『富山城』『日本城郭体系』7 新人物往来社
- 高岡 徹 1981「城館研究の視点(2)」「富山史壇』77号 越中史壇会
- 高岡 徹 1987「第三節 神保氏再興と富山築城」「富山市史 通史上巻』
- 高瀬 保 1992「私と近世富山町・富山城」「富山市考古資料館報』No23
- 富山市教育委員会 2004「富山城跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2005「富山城跡発掘調査概要—西町・絶曲輪地区市街地再開発事業に伴う近世富山城下町発掘調査概要—」
- 富山市教育委員会 2006「富山城跡試掘確認調査報告書」
- 富山市教育委員会 2007「富山城跡試掘確認調査報告書」
- 富山市教育委員会 2008「富山城跡試掘確認調査報告書」
- 富山市郷土博物館 1999「富山城の歴史展」
- 富山市郷土博物館 2000「富山の近代化～街はこうしてつくられた～」
- 富山市郷土博物館 2006「富山城ものがたり」
- 富山市史編集委員会 1960『富山市史』第一巻
- 中村太一郎 1993「橋のある風景」「目で見る富山市の100年」郷土出版社
- 古川知明 2005「中近世富山城研究の現状と課題」「富山史壇』第147号 越中史壇会
- 古川知明 2006「慶長期富山城と城下町構造」「富山史壇』第150号 越中史壇会
- 堀内大介 2008「富山市グランドプラザ検出の井戸SE01について」「富山市の遺跡物語』第9号 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
- 宮田進一 1997a「越中国における土師器の編年」「中・近世の北陸—考古学が語る社会史ー」 桂書房
- 宮田進一 1997b「越中窯戸の変遷と分布」「中・近世の北陸—考古学が語る社会史ー」 桂書房
- 宮田進一 2007「越中湖戸窓」「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年ー」補遺編 向実行委員会
- 森 隆 2003「富山県の中世土器(資料編)」「富山考古学研究』第6号 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 古岡康暢 1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館



富山城周辺の空中写真（1946年米軍撮影）



20—1T 全景（北西から）



20—1T SK1・2（北から）



20—1T SD1・SP1～3（北から）



20—1T 南壁土層断面（北から）



20—1T 東壁土層断面（西から）



20—1T SK1 磚検出状況（北から）



20—1T 黒色土検出状況（東から）



20—2T 全景（北西から）



20—2T 南壁土層断面（北から）



20—2T 東壁土層断面（西から）



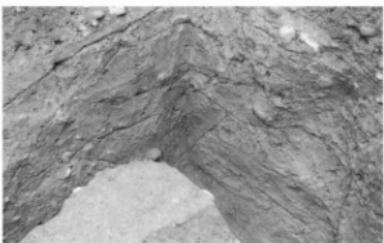
20—2T SK1 方形鉄板出土状況（東から）



20—2T 造成面（第3面）検出状況（北西から）



20—3T 全景（南西から）



20—3T SK1（南東から）



20—3T 北壁土層断面（南から）



20—3T SE1（南西から）



20-3T 東壁土層断面（西から）



20-3T 西壁土層断面（東から）



20-4T 全景（東から）



20—5T 全景（北東から）



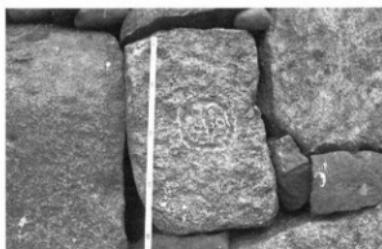
20—5T 南壁土層断面（北から）



調査参加者



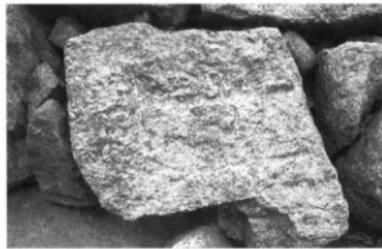
P面石垣刻印（1）



P面石垣刻印（2）

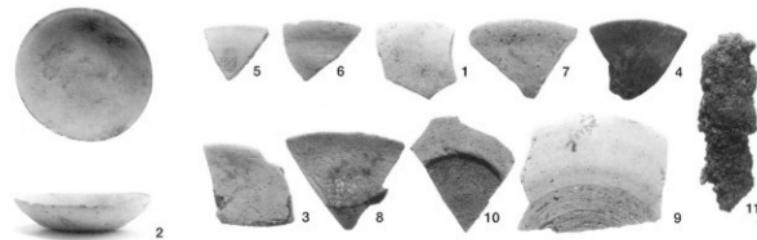


P面石垣刻印（3）



P面石垣刻印（4）

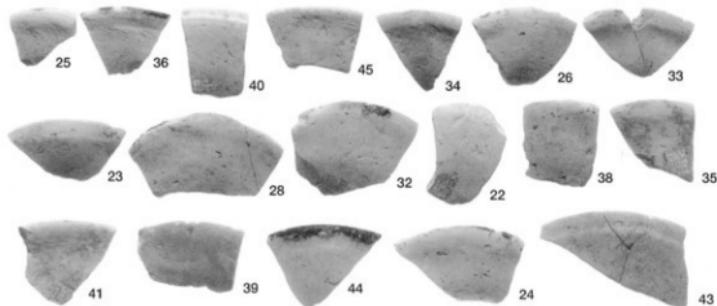
圖版 7  
出土遺物(1)



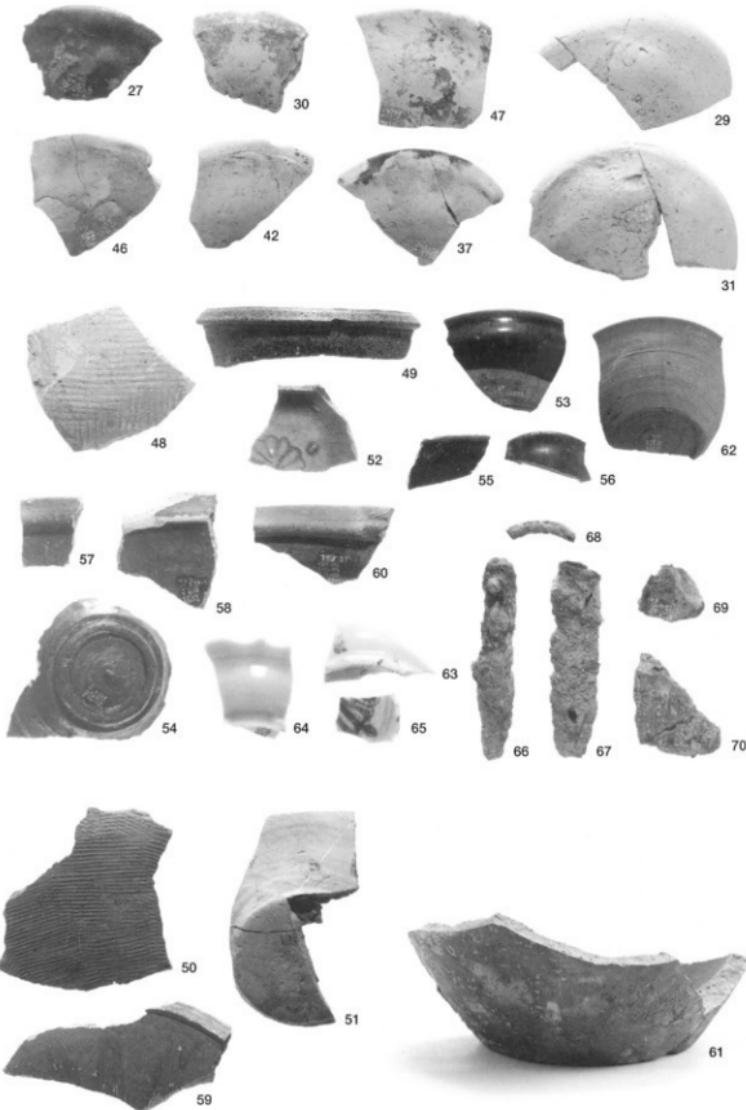
20-1T 出土遺物



20-2T 出土遺物



20-3T 出土遺物



20-3T 出土遺物



本丸櫻手北石垣東面（P面）オルソ画像

## 報 告 書 抄 錄

富山市埋蔵文化財調査報告34

**富山城跡試掘確認調査報告書**

2009年3月19日発行

発 行 富山市教育委員会

福 塚 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター  
〒930-0091 富山市愛宕町一丁目2番24号

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

印 刷 中央印刷株式会社

